

第4章 銚子市の歴史文化の特徴

1. 銚子市の歴史

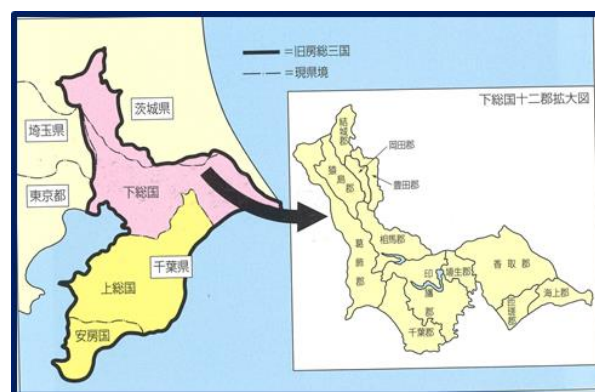
(1) 町の成り立ち

大和政権下、銚子は下総国の下海上国に属し、国造が置かれ、統治されていました。その後、律令国家が成立し、下総国には葛飾、千葉、印旛、厩瑤、海上、香取、埴生、相馬、猿島、結城、岡田の11郡が置かれ、銚子市域は海上郡に比定されています。そして、15の郷により構成されている海上郡の三前郷、三宅郷、船木郷を中心に一部橘川郷や横根郷に広がると推定されています。

その後、平安時代末期頃には、銚子市域と旭市（旧飯岡町及び旧旭市）の一部にわたる広域の荘園の三崎庄（海上庄）を九条家が所有していました。平将門の乱や平忠常の乱などで荒廃した房総半島で土地を開発し、力をつけた千葉氏が守護の地位を確保し、在庁官人としての勢力を得ていきました。源頼朝が挙兵した際、下総国の守護は千葉常胤で、頼朝に忠勤して多くの功績を残したことにより、厚い信頼を得て、下総地域で常胤の子孫が「千葉六党」として発展したのです。

片岡次郎常春が所領していた三崎庄が千葉常胤に与えられて以降、当地域は常胤の六男である胤頼が領有しました。その後、胤頼の孫胤方が「海上次郎」として海上氏を名乗り、その拠点が中島城とされています。胤方は、子孫に本庄、船木、辺田、高上、松本の地を分け与え、それぞれに統治させました。当地域に残る12世紀末から16世紀にかけての金石文や古文書に海上氏の名前が登場し、この間の海上氏による統治の様子を知ることができます。

1590年（天正18）に徳川家康が江戸に入府する際、松平外記伊昌は飯沼領2,000石で銚子に入りました。江戸時代には、現在の銚子市域は香取郡6村と海上郡35村から成り、その土地の多くは幕府領や旗本知行地でした。その後、1709年（宝永6）には上野高崎藩領に、そして1717年（享保2）には幕府領となり、再び上野高崎藩領として幕末まで続けました。この所領の管轄のために飯沼には高崎藩の陣屋（銚子役所）が設置され、郡奉行などが勤務し、現在、陣屋町という地名も残っています。



「千葉県の歴史 資料編近世5」より引用

図21 下総国の領域

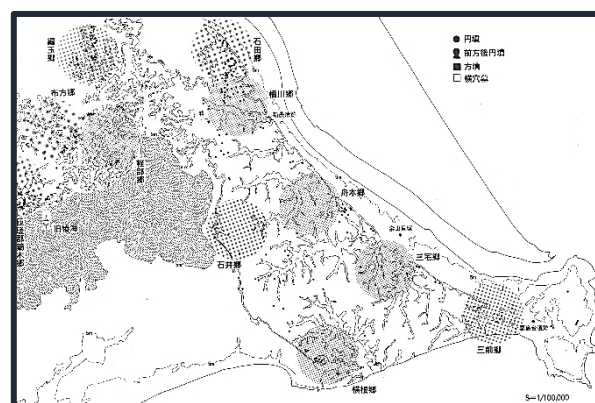


図22 海上郡内の状況

(2) 市域の変遷

1834年(天保5)の天保郷帳によると、江戸時代後期に現在の銚子市域には、海上郡と香取郡に属する41の村々がありました。そして、1869年(明治2)5月に千葉県内には葛飾県及び宮谷県と23の藩があり、その時点で銚子は宮谷県に属していましたが、同年11月の第一次府県統合により新治県に含まれることになり、1875年(明治8)に新治県が千葉県に編入され、銚子市域は千葉県の第15大区第12小区、第16大区第1～6小区、同8～9小区となりました。

1889年(明治22)の町村制施行に伴い本銚子町・銚子町・伊豆原村・高神村・豊浦村・豊岡村・海上村・船木村・椎柴村・豊里村が成立しました。

1891年(明治24)に椎柴村が椎柴村となり、伊豆原村は町制を施行し、西銚子町へ改称しました。1933年(昭和8)に銚子町・本銚子町・西銚子町・豊浦村が合併して銚子市が誕生し、千葉県内で千葉市に次いで市制が施行され、その後大きく4回の合併を行いました。

1937年(昭和12)に高神村・海上村、1954年(昭和29)に船木村・椎柴村、1955年(昭和30)に豊里村、1956年(昭和31)に豊岡村が銚子市と合併し、1957年(昭和32)旧豊岡村の一部が飯岡町に編入され、1958年(昭和33)には飯岡町の一部が銚子市に編入されたことで、現在の市域となりました。江戸時代の入会地や開発などが行われた船木村の大字「白石鶏沢新田」と「九ヶ村新田」は、1955年(昭和30)に「白石町」と「新町」に改称しています。

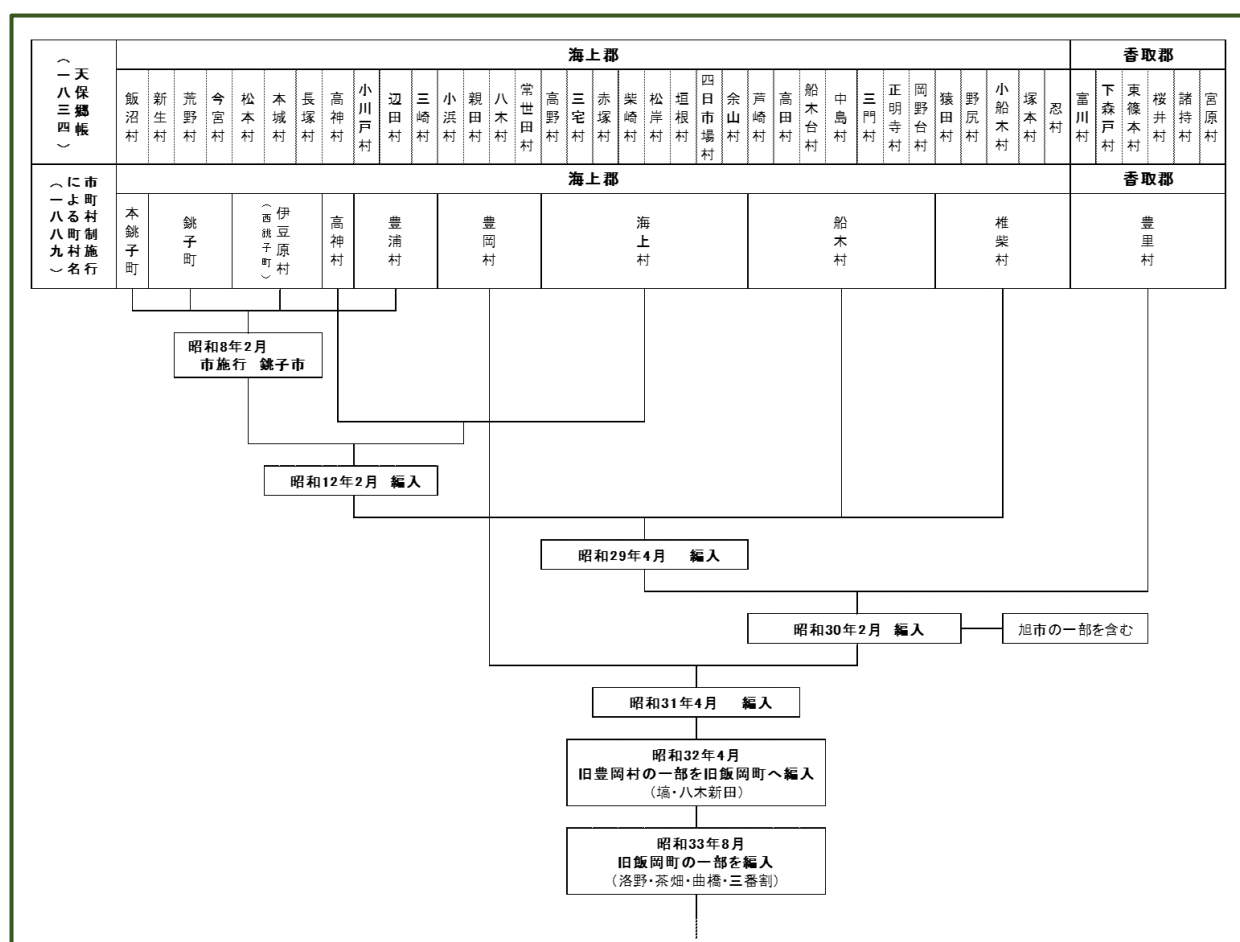


図23 銚子市の沿革

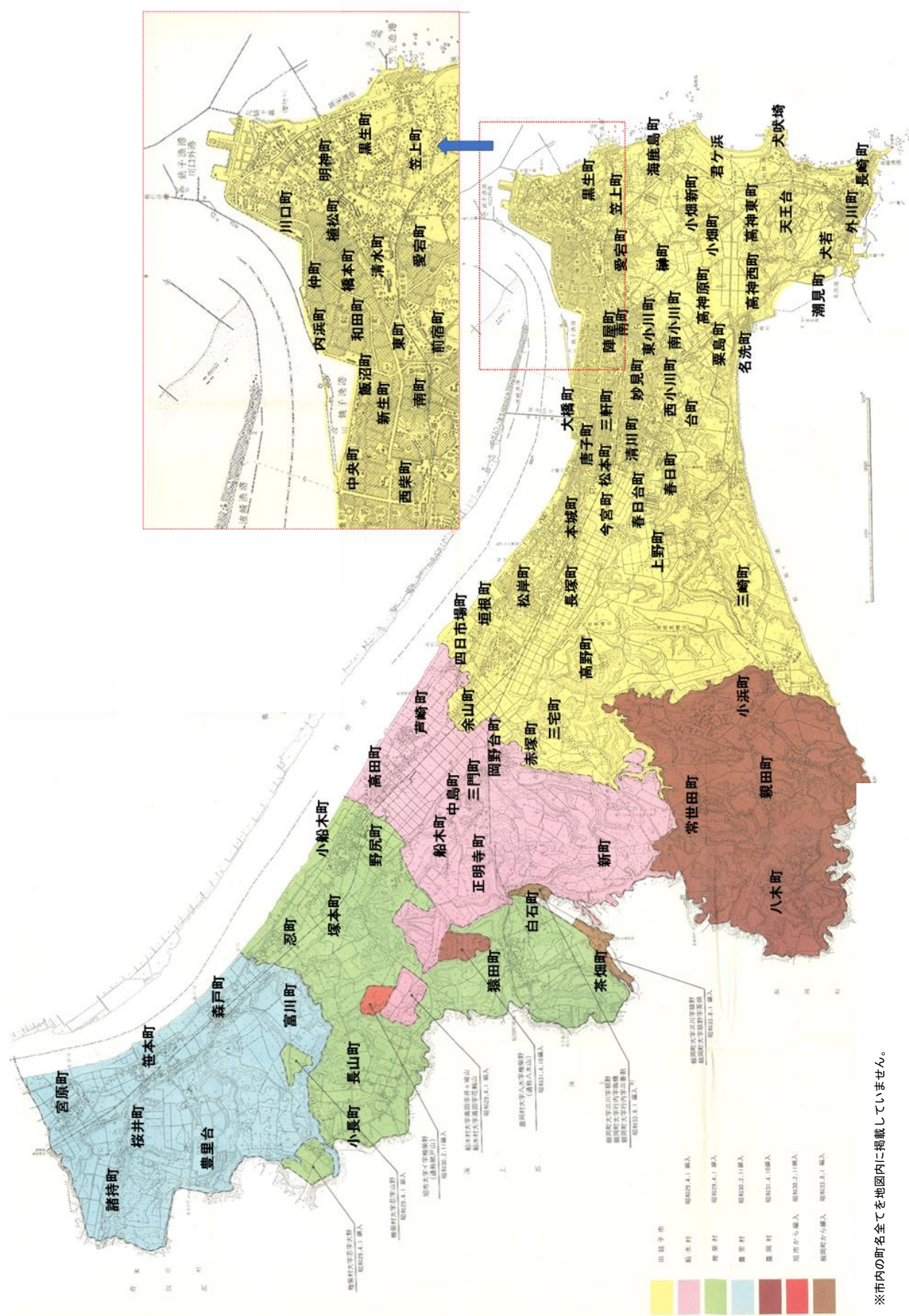


図 24 合併の変遷と現在の町名

(3) 歴史の概要

『銚子市史』をはじめとする資料等を参考にして、本市の歴史の概要を時代ごとにまとめました。

◆旧石器時代

これまでに発掘調査を実施した野尻遺跡^{のじり}（野尻町）と三崎3丁目遺跡^{せきかく}（三崎町）の出土遺物は、約28,000年前の人々の暮らしを伝えてくれます。

三崎3丁目遺跡は屏風ヶ浦を眼下に望む標高約60mの下総台地上に位置し、約7,500点の石器や石核^{せきかく}が出土しています。出土した石器の石材は、黒生海岸周辺で確保できる銚子産のチャートを使用したものが圧倒的に多く、海岸線に露出している地質時代の岩石が材料として使われ、石材産地に近い遺跡として重要な意味を持っています。

また、伊豆諸島の神津島から搬入された黒曜石、北関東や東北地方から持ち込まれた硬質頁岩^{こうしつげつがん}を材料とする石器も見つかっており、他地域との交易・交流の様子を知ることができます。

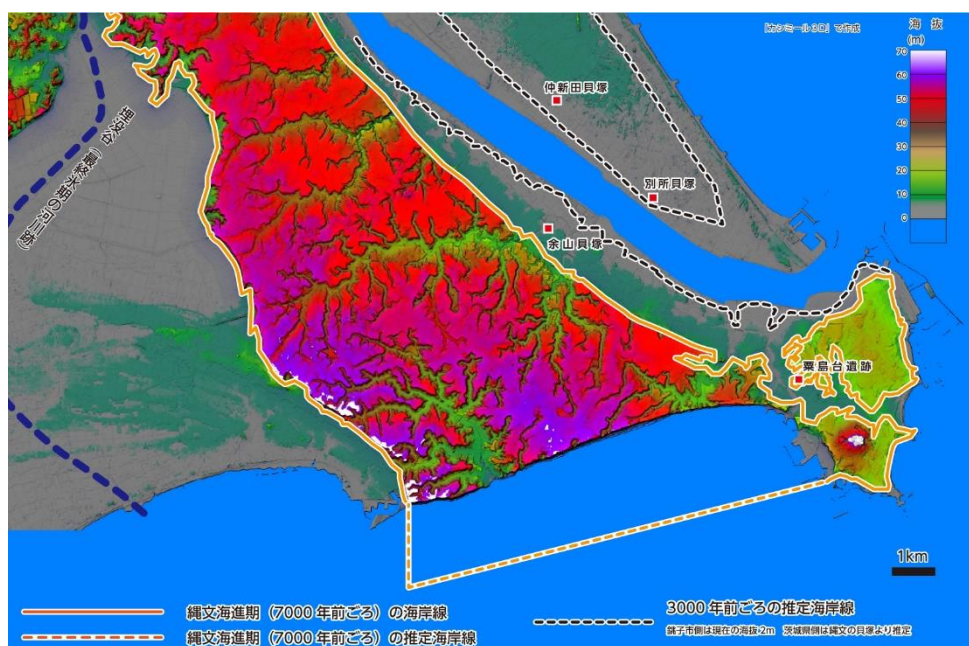


三崎3丁目遺跡

上：遺物出土状況 下：礫群^{れきぐん}

◆縄文時代

縄文時代前期の銚子半島は、縄文海進により海水面が上昇し、銚子半島の北部と君ヶ浜方向から海水が侵入し、古高神湾が形成され、北側の古笠上台地が半島から分断され、孤島となり、その後、縄文海退により古高神湾の君ヶ浜方向の東湾が砂州でふさがれていきました。そして、し



銚子ジオパーク推進協議会提供

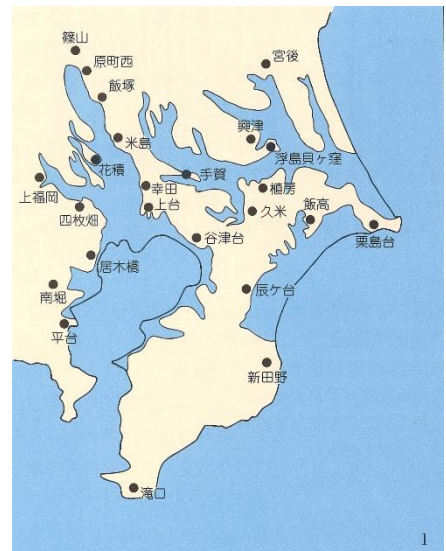
図 25 銚子半島の変遷

だいに北部の開口部も閉じ、^{しょうたく}沼沢化し、^{でいたんそう}泥炭層ができ、湿地化していきました。

また、半島の北部は、現在の霞ヶ浦から利根川下流域の印旛沼を取り込んだ非常に広い古鬼怒湾が形成されました。

このような環境の中で、古高神湾に面する標高約7mの微高地上に縄文時代前期から中期の栗島台遺跡（南小川町）があり、漆塗りの縄文土器やヤシの実容器、コハク製の玉類などが出土しています。利根川から遡ること約5kmにある縄文時代後期から晩期の余山貝塚は、古鬼怒湾に近い標高約7mの浜堤上に位置し、現在より外洋に近い環境でした。この遺跡はベンケイガイの貝製腕輪（貝輪）、^{かいせいうでわ}釣針やモリ、ヤスなどの骨角器が大量に出土した遺跡として知られています。

これらの遺跡は、水域や下総台地に近く、それぞれの場所の豊かな恵みを得やすい環境にありました。そして、水域は交通路としても利用可能で、遺跡から出土する縄文土器や石器から東北地方や西関東などをはじめとする他地域との交易を読み取ることができます。縄文時代も自然の恵みを活かした暮らしや他地域との交易や交流に適した土地でした。



縄文時代前期



縄文時代後期

図26 貝塚から見た海岸線

「千葉県の歴史 資料編考古1」より抜粋



栗島台遺跡
コハク製品及び未成品、剥片



栗島台遺跡
ヤシの実容器（漆塗）



余山貝塚
貝製腕輪及び未成品

◆弥生時代

弥生時代に入り、縄文時代の狩猟採集を主体とした生活から稲作を中心とした生産経済へと変わりました。稲作は土木工事や用水の管理が必要となったことに伴い、人々の生活が組織化され、集団の大型化が進み「ムラ」となり、そして、稲作に伴う水管理の問題が発生し、集団の統合や集団間の上下関係を生み、より大きな「クニ」になりました。

本市では、標高約 50m の下総台地上に位置する野尻遺跡から炭化米が出土しており、弥生時代に米作りが行われたことが明らかになっています。この野尻遺跡や屏風ヶ浦を望む位置にある佐野原遺跡（三崎町）から竪穴住居跡が検出されていることで、下総台地上に比較的まとまった集落があったと考えられますが、市内の弥生時代の遺跡の調査は少なく、今後も成果を積み重ねながら検証していく必要があります。

弥生時代の交易を示す資料として、椎柴小学校遺跡（小船木町）から出土した弥生土器があります。胎土分析の結果からその一部に東海地域から持ち込まれた搬入品の可能性がある土器片が含まれていることが報告されています。また、佐野原遺跡から出土した「佐野原式土器」は、北関東地方と南関東地方の弥生土器に見られる特徴を持ち、当地域が文化圏の境界上にあることを示しています。

旧石器時代以降、広域に人とモノが移動し、さらに文化の波及による影響を人々が受けていることも見て取れます。

◆古墳時代

古墳時代の銚子周辺は、現在の霞ヶ浦一帯に香取の海が広がり、「古事記」などに記されている下海上国造の支配下で、海上郡に属していました。当地域を治める支配者たちは、香取の海を眼下に望む沿岸に古墳を造営しました。

現在、市内で把握されている最も規模が大きな古墳は、全長約 35m、高さ約 4 m を測る前方後円墳の野尻 1 号墳（野尻町：1979 年（昭和 54）4 月 11 日市指定）で、この古墳を含む野尻古墳群には前方後円墳 1 基、円墳 8 基、方墳 3 基が確認されています。野尻古墳群は椎柴地区にあり、この地区には野尻 1 号墳のほか全長 30m、高さ 5 m の前方後円墳の弁財天 1 号墳など比較的規模が大きい古墳が所在しています。また、円墳 9 基と方墳 2 基で構成されている西栗古墳群をはじめ長塚見晴台周辺も古墳がまとまって分布しています。



佐野原遺跡出土の弥生土器



佐野原遺跡出土の紡錘車と勾玉（コハク製）



大宮戸遺跡出土の土師器

市域内でこれまで調査が行われた古墳のほとんどが古墳時代後期に造築されたものです。

古墳時代の集落も、これまで同様に下総台地及び利根川沿いの低地に形成されています。大宮戸遺跡（春日町）は下総台地上に位置し、出土した古墳時代前期の土器の中には、非常に丁寧な作りで、赤彩が施されている土器（埴）が複数出土していることから、祭祀的な行為がなされていたことが想像できます。

椎柴小学校遺跡から出土した石製模造品に用いられた緑色凝灰岩は、北関東方面から持ち込まれたと考えられ、香取の海が物流の重要なルートの一つとして利用されていたことをうかがい知ることができます。

◆奈良・平安時代

「和名類聚抄」によると銚子市は下総国海上郡内の「三前（崎）郷」、「三宅郷」、「船木郷」と「橘川郷」、「横根郷」に一部属しています。現在の地名でいうと「三前（崎）郷」は三崎町周辺、「三宅郷」は三宅町周辺、「船木郷」は船木町周辺に比定されています。

「三宅」は律令下の「屯倉」が設置されていた場所、「船木」は「船木部」が置かれ、造船用材を扱う地であったと言われています。香取の海が蝦夷平定にとって重要な交通路となり、船木郷をはじめ当地域の重要性が高まっていたと考えられています。この時期の遺跡は、低地上や下総台地上の全域に確認でき、新農遺跡（桜井町）や西町西遺跡（長塚町）の発掘調査では、住居跡が確認されています。

また、奈良時代以降、賢徳寺（高神東町）や観行院（春日町）、円福寺（馬場町）が開創し、渡海神社（高神西町）や銚子港神社（飯沼町）も創建されました。市内で最も古い仏像は、東光寺の平安時代後期（11世紀半ば～後半頃）に製作された「木造阿弥陀如来立像」（小船木町：1994年（平成6）3月25日市指定）です。

平安時代後半は、荘園や国衙領などの荘園公領制の中で耕地開発が進んだ時代でしたが、銚子市内での所領関係がわかる資料は少なく、平安時代末に九条家領



椎柴小学校遺跡出土遺物 碧玉



椎柴小学校遺跡出土遺物 石製模造品



木造阿弥陀如来立像（東光寺）
市指定文化財：小船木町



新農遺跡出土遺物

の三崎庄となり、海上庄とも号して、市域と旧飯岡町（現旭市）などを含めた広域の荘園であったことが分かっています。

◆中世（鎌倉時代～室町時代）

939年（天慶2）の平将門の乱や1028年（長元1）の平忠常の乱によって荒廃した房総半島では、その後耕地の再開発が進められ開発領主が生まれました。その中から上総国の上総氏、下総国の千葉氏が大きな武士団を形成しました。そして上総^{かずさひろつね}広常と千葉常胤は、1180年（治承4）に源頼朝が挙兵すると頼朝を支持し、鎌倉幕府が成立すると常胤は下総国の守護となり、その職を室町時代まで世襲しました。大勢力を誇った広常が謀反の疑いで粛正された後、常胤はその旧領の多くを与えられ、陸奥・九州にも所領を得て勢力を伸ばしていきました。それらの所領は6人の子に譲られ、六男の胤頼が香取郡^{とうのしょう}東庄^{とうのしょうまち}（現東庄町）を相続し、東^{とう}氏を称しました。

海上庄の領主になったのは、その東胤頼の孫にあたる海上氏で、中島城（中島町：1967年（昭和42）2月20日市指定）などを拠点に当地を支配しました。さらにその子孫は海上庄内の本庄、飯沼、船木、松本、辺田、馬場、高上等を分領して、その地名を名字としました。現在、それぞれが拠点にしたとみられる居館跡^{きょかん}や城郭跡のいくつかが推定されています。その後、1590年（天正18）に豊臣秀吉軍の攻撃による小田原北条氏の滅亡に伴い、北条方の千葉氏は没落し、海上氏も領主としての地位を失いました。

海上氏の信仰は厚く、多くの寺社に寄進をして庇護^{ひご}し、中でも菩提寺として一族の信仰の要になっていた円福寺（飯沼観音、飯沼町）の別当職^{べっとう}は、一族の本庄^{もと}盛胤の子の飯沼氏が継承し、その歴史を伝える古文書が円福寺に残されています。

1374年（応安7）の「海夫注文^{かいふちゅうもん}」（香取文書）には、香取の海の南に位置した飯沼・荒野^{こうや}・垣根^{かきね}・野尻^{もり}・森戸^{もりと}・笹本の津が書上げられています。津（船舶の停泊地）には地頭の支配下に海夫（海民）が居住し、魚介を供菜物として香取神宮に納めていました。また津は



飯沼観音



五輪塔・宝篋印塔（飯沼観音境内）



板碑（康応二年閏三月十六日銘）

市指定文化財：正明寺町



中島城

市指定文化財：中島町

商品の積み下ろし地でもあり、1560年（永禄3）には九十九里方面からの塩荷が船木・野尻宿に下ろされるなど、船木や高田にも津ができ香取の海を舞台とする人々が活動していました。

◆近世（安土・桃山時代～江戸時代）

1590年（天正18）、徳川家康の関東入国に伴い松平外記（伊昌）による統治が始まりました。その後、上野高崎藩領となり、幕府直轄地^{ちよつかつち}を経て、幕末まで高崎藩領が続き、郡奉行らが務めた陣屋が置かれました。徳川家康は、江戸市中を水害から守ることと新田開発のため、1621年（元和7）から利根川の東遷事業を始めました。1645年（正保2）に利根川本流がようやく銚子口に流れ、一大工事が完成し、ほぼ現在の流路と同じ利根川が形成されました。

銚子は、東廻り海運で運ばれてきた東北諸藩の物資を銚子湊で高瀬船に積み換え、利根水運で江戸へ運ぶ一大輸送基地になりました。また、九十九里や飯岡方面から運び込まれた物資は利根川沿いの野尻、高田を代表とする河岸場^{かしぼ}で積み換え、江戸に運びました。

銚子沖の鰯を求めて、紀州からやって来た旅網^{たびあみ}※1の漁師たちはしだいに銚子に住みつき、漁業の町の礎を作りました。中でも、崎山治郎右衛門は、1658年（万治1）に外川に移住し、築港や碁盤目状の街区の整備を実施しました。その後、紀州から大勢の人を呼び寄せ、「外川千軒大繁盛」といわれるほどの賑わいある町へ発展させました。長崎^{なあらい}、名洗^{いがいね}、飯貝根^{はちだあみ}などにも漁業集落が形成され、カツオ漁や八手網※2によるイワシ漁、そして豊漁に沸く鰯を使った干鰯生産などで浜は大いに賑わいました。

関西方面からは漁業だけではなく、醤油醸造の技術ももたらされました。1616年（元和2）に銚子の豪商3代田中玄蕃が西宮（現在の兵庫県西宮市）の海産物問屋である真宜九郎右衛門から醤油醸造の技術を伝授され、銚子で製造を始めました。利根水運や地理的にも好条件に恵まれた銚子の醤油は「地廻り醤油」と呼ばれ、味も江戸庶民の嗜好に合わせた関東風の濃口醤油へと改良したことで、需要を高め、生産力を向上さ



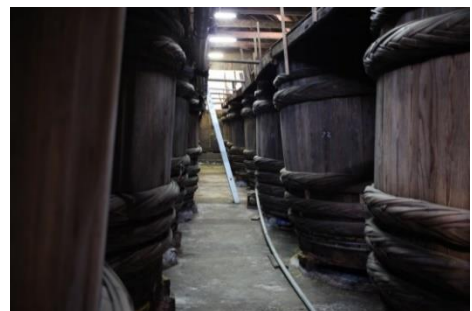
利根川



崎山治郎右衛門碑



外川の町並み



醤油醸造（小倉醤油）



紙本淡彩銚子名所絵図（妙見宮）

市指定文化財：八木町

せ、発展しました。

江戸時代に入り、寺社参詣をはじめとして、各地の名所、旧跡を訪れる旅が盛んになりました。その中で、利根水運を利用した香取神宮、鹿島神宮、息栖神社^{いさす}を参詣する東国三社詣や坂東三十三観音霊場第二十七番札所であった飯沼観音への参詣という信仰の旅が一般化しました。さらに、旅のオプションツアーとして銚子の海岸線の奇岩奇礁などを中心とした景勝地をめぐる「磯めぐり」が人気を博しました。そして、多くの文人墨客が訪れ、自然景観の素晴らしさを流布し、名所記等旅の案内書も出版されたことで、銚子が江戸庶民の中に広く知れわたり、江戸からの身近な旅行先となりました。本市には、天明年間の銚子名所 14 ケ所の風景画とその場所を説明する小文が記された「紙本淡彩銚子名所絵図」^{しほんたんさいちようしめいしよえず}（八木町：2002 年（平成 14）3 月 28 日市指定）があります。この旅行客の輸送にも利根水運が活用され、人の往来とともに、江戸の文化も銚子へ持ち込まれました。

※1 他の地域から他人や他団体が権利を有する特定の漁場に入って漁業を行うこと。

※2 主にイワシやアジを獲るための、大きな風呂敷を広げたような浮敷網。江戸時代から使用されたが、3 隻の漁船が必要なため、明治中頃からあぐり網にとって代わられた。

◆近・現代

1867 年（慶応 3）に幕藩体制が終わり、銚子市域は宮谷県となり、新治県を経て、1875 年（明治 8）に千葉県となりました。1889 年（明治 22）の町村制に伴い、飯沼村が本銚子町に、荒野村、新生村、今宮村が合併し銚子町に、長塚村、松本村、本城村が西銚子町となり、その後、1933 年（昭和 8）にこれらの 3 町と豊浦村が合併し、千葉県下第 2 番目の市として銚子市が誕生しました。そして、1937 年（昭和 12）には高神村と海上村、1954 年（昭和 29）に船木村、椎柴村が、1955 年（昭和 30）豊里村、1956 年（昭和 31）豊岡村を編入し、現在の市域になりました。

明治期に入り、銚子には 1874 年（明治 7）に犬吠埼灯台（犬吠埼：2010 年（平成 22）4 月 28 日国登録）、1886 年（明治 19）に銚子測候所、1908 年（明治 41）に銚子無線電信局などの近代化を支える施設が開設しました。また、鉄道は、1897 年（明治 30）、総武鉄道の成東－銚子間が開通し、本所（現：錦糸町）と銚子間が全通しました。

江戸時代以降、銚子と江戸を結んだ利根水運は、1881 年（明治 14）に銚子汽船会社が設立され、翌 1882 年（明治 15）に銚子一木下河岸間に蒸気船銚子丸が就航し、1895 年（明治 28）から銚子汽船の東京までの直行航路が開かれました。明治 20 年代には高瀬船^{たかせふね}が利根川を往来していましたが、鉄道の開通により利根水運の役割は減少していきました。

明治維新により幕藩体制が崩壊したことで江戸と東北を結ぶ東廻り海運が衰退し、利根水運は銚子とその他の沿岸地域と東京を結ぶ輸送ルートとして残りましたが、商港としての銚子湊の役割が大きく後退し、町の賑わいや活気が失われました。しかし、漁業は漁船の動力化など漁業技術の近代化が進み、鉄道の発達による鮮魚消費市場の拡大などの影響も受け、江戸時代以降も重要性の高い産業でした。このような中で、最大の課題が銚子湊の商港から漁港への転身、漁港整備でした。1920 年（大正 9）に国会議員となった濱口吉兵衛や小野田周斎らが尽力した結果、1925 年（大正 14）に近代的な漁港へと転身を図るための工事が開始されました。近代的な施設と機能を備えた漁港整備は、漁業発展の第一歩となりました。その後も、銚子魚港整備工事は計

画的に進み、1960 年（昭和 35）には特定第3種漁港に指定され、総合漁業基地の確立を目指し更なる整備が進められる中で、日本有数の水揚げ量を誇る漁港へと発展しました。

この漁港整備とともに銚子が漁業の町として再興したのは、明治末期から始まった漁船の動力化の影響が大きく、さらに鉄道網が完成し、迅速に水揚げされた魚が市場に出回るようになったからです。干鰯や鰯粕など肥料としての需要が主だった傷みやすい鰯は鮮魚としての需要も増加してきました。イワシ漁は「八手網」から「あぐり網」※での漁となり、漁獲高が向上し、サンマ漁やカツオ漁、マグロ漁も盛んになりました。

同じく江戸時代から始まった醤油醸造業も順調に発展し、1889 年（明治 22）に銚子醤油醸造業組合が結成され、昭和に入り株式会社化されました。現在、市内には5社の醤油醸造関連会社があります。

明治時代に入っても「磯めぐり」は銚子の観光メニューの一つでした。温暖な気候や健康志向がブームとなり保養地や海水浴場として、さらに、銚子で最も高い愛宕山から見る景観も観光の人気を博した見どころとなり、多くの観光客を集めました。海岸周辺は漁港や港湾施設整備により埋め立てられ、磯めぐりの景観の一部を失うこととなりましたが、1959 年（昭和 34）に水郷筑波国定公園となり、自然景観の魅力が銚子観光を支えています。

※ 網の上に「浮き」を、下に「錘」をつけた帯状の網で魚群を囲み、網底をすばやくしぼって魚を囲い込んで獲る巻き網。
イワシ・アジなどの漁につかわれる。



市制施行記念 「踊る大銚子」より
(昭和8年制作記録映像)

2. 銚子資産の概要と特徴

旧石器時代から風土と地の利を活かしながら暮らしてきた先人たちは、文化財を含む数多くの銚子資産を育んできました。銚子市教育委員会（以下、「市教委」という。）は、それらの銚子資産を把握し、価値を評価し、地域全体で共有していくための事業に取り組みつつ、保護法に基づき、価値が高く、重要なものについては指定や登録制度により保護措置を講じてきました。

(1) 銚子資産の指定等の状況

1950年（昭和25）に「文化財保護法」、1955年（昭和30）に「千葉県文化財保護条例」が制定され、本市で「猿田神社本殿」が1955年（昭和30）12月に初めて県の指定文化財になりました。

現在、国指定4件、県指定14件、市指定14件の文化財があります。指定を受けた文化財の類型は、彫刻8件、天然記念物6件、建造物4件、工芸品及び史跡が各3件、古文書及び絵画、考古資料が各2件、歴史資料及び無形文化財が各1件となっています。

1965年（昭和40）に銚子市八木町と飯岡町及び海上町（現：旭市）の各地区の念仏講で結成されていた無形民俗文化財「飯岡の芋念仏」が県指定文化財に指定されましたが、高齢化と後継者不足により保存会が解散し、平成18年度に指定解除となった文化財もあります。

また、江戸時代後期以降の利根水運や水産業の歴史を伝える建造物や近代化産業遺産を国登録有形文化財として保護しており、現在16件あります。

		国		県	市	合計
種類		指定・選定	登録	指定	指定	
有形文化財	建造物		16	3	1	20
	絵画				2	2
	彫刻	1		3	4	8
	工芸品	1		2		3
	書籍・典籍					
	古文書			1	1	2
	考古資料			1	1	2
	歴史資料				1	1
無形文化財				1		1
民俗文化財	有形の民俗文化財					
	無形の民俗文化財					
記念物	遺跡				3	3
	名勝地	1（1）				1（1）
	動物・植物・地質鉱物	2（1）		3	1	6（1）
文化的景観						
伝統的建造物群						
合計		5（1）	16	14	14	48

※（ ）内は、うち1件が名勝及び天然記念物として重複指定されているため、合計の欄が一致しません。

※ 埋蔵文化財包蔵地は約190カ所あります。

表3 銚子の指定等文化財 令和2年（2020）11月1日現在

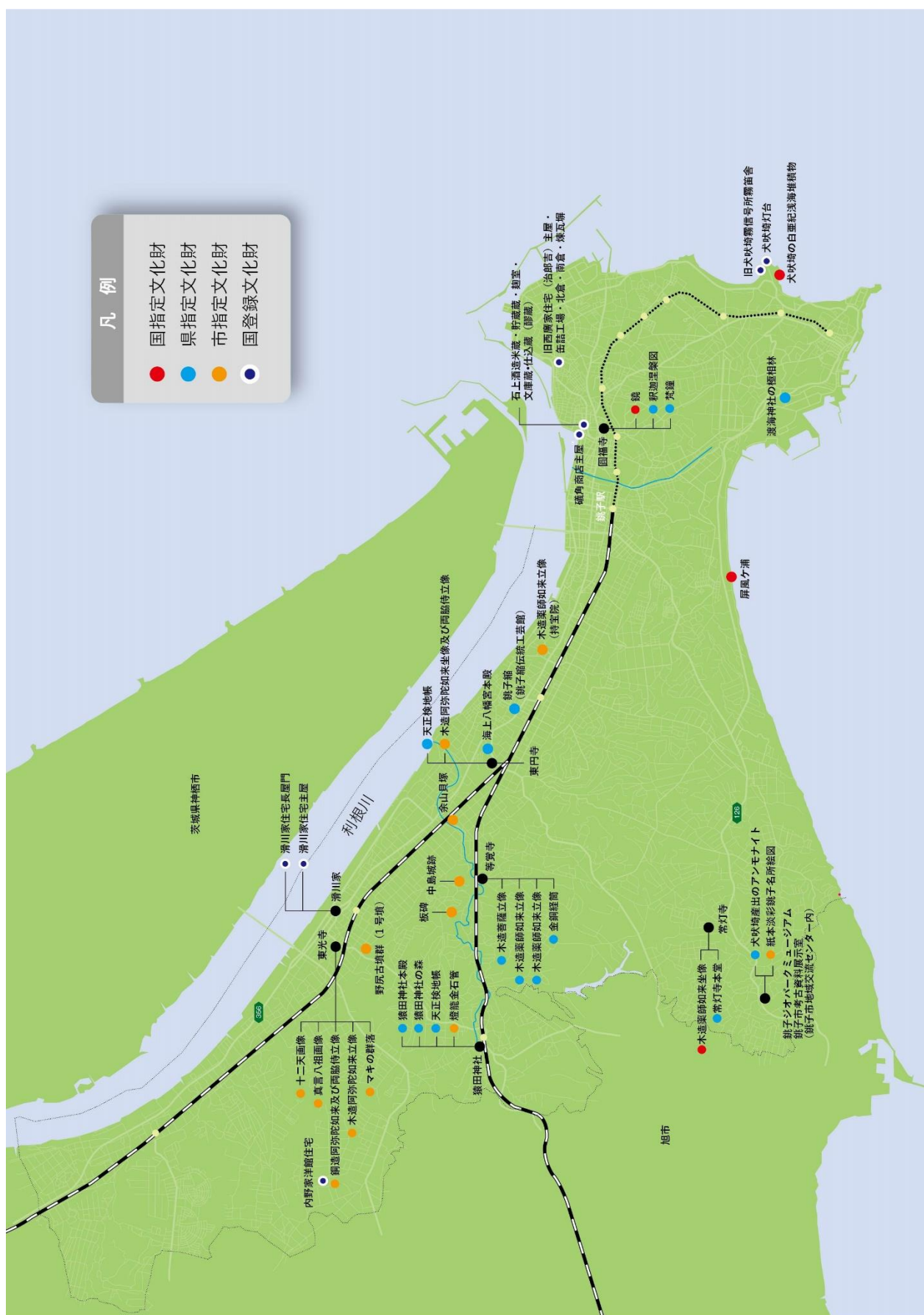


図 27 銚子市の指定・登録文化財の分布

指定区分	種 別	名 称	員数等
重要文化財	彫刻	木造薬師如来坐像	1 軀
	工芸品	鏡	1 口
国 指 定	天然記	犬吠埼の白亜紀浅海堆積物	
	名勝および天然記念物	屏風ヶ浦	
千葉県指定	有・建	猿田神社本殿 附 棟札(延宝八年在銘)	1 棟／1 枚
	有・建	常灯寺本堂 附 宮殿 棟札(寛文十三年在銘)	1 棟／1 基／1 枚
	有・建	海上八幡宮本殿	1 棟
	有・工	梵鐘(享徳十一年在銘)	1 口
	有・工	釈迦涅槃図 附 釈迦涅槃図由来書	1 幅／3 巻
	有・彫	木造薬師如来立像	1 軀
	有・彫	木造薬師如来立像	1 軀
	有・彫	木造菩薩立像	1 軀
	有・古	天正検地帳	1 件
		下総国海上郡三崎庄猿田郷村野帳	(4 冊)
		下総国海上郡三崎庄堀之内枝柴崎之郷屋敷帳及び水帳	(7 冊)
	有・考	金銅経筒(建長四年在銘)	1 合
	無形	銚子縮	
	天然記	渡海神社の極相林	
	天然記	猿田神社の森	
	天然記	犬吠埼産出のアンモナイト	6 点 (5 標本)
銚子市指定	有・建	燈籠金石管	2 管
	有・絵	十二天画像	12 幅
	有・絵	真言八祖画像	8 幅
	有・彫	木造薬師如来立像	1 軀
	有・彫	銅造阿弥陀如来及び両脇侍立像(善光寺式三尊)	3 軀
	有・彫	木造阿弥陀如来立像	1 軀
	有・彫	木造阿弥陀如来坐像及び両脇侍立像	3 軀
	有・古	玄蕃日記	95 冊
	有・考	板碑(康応二年閏三月十六日銘)	1 基
	有・歴	紙本淡彩銚子名所絵図	1 巻
	史跡	中島城跡	
	史跡	余山貝塚	
	史跡	野尻古墳群(1 号墳)	
	天然記	マキの群落	

表4 銚子市の指定文化財 令和2年11月1日現在

指定区分	種 別	名 称	員数等
国 登 録	建造物	内野家住宅洋館	1 棟
	建造物	犬吠埼灯台	1 基
	建造物	磯角商店主屋	1 棟
	建造物	旧犬吠埼霧信号所霧笛舎	1 棟
	建造物	滑川家住宅主屋	1 棟
	建造物	滑川家住宅長屋門	1 棟
	建造物	旧西廣家住宅（治郎吉）主屋	1 棟
	建造物	旧西廣家住宅（治郎吉）缶詰工場	1 棟
	建造物	旧西廣家住宅（治郎吉）倉庫（北倉）	1 棟
	建造物	旧西廣家住宅（治郎吉）倉庫（南倉）	1 棟
	建造物	旧西廣家住宅（治郎吉）煉瓦塀	1 基
	建造物	石上酒造米蔵	1 棟
	建造物	石上酒造麹室	1 棟
	建造物	石上酒造仕込蔵（醪蔵）	1 棟
	建造物	石上酒造貯蔵蔵	1 棟
	建造物	石上酒造文庫蔵	1 棟

※ 令和2年10月16日に「犬吠埼灯台」及び「旧犬吠埼霧信号所霧笛舎」（いずれも国登録有形文化財）は、「犬吠埼灯台」として重要文化財に指定することを国の文化審議会が文部科学大臣に答申しました。

表5 銚子市の登録有形文化財 令和2年11月1日現在

（2）把握した銚子資産

これまでに国、県、市及び研究機関等が実施した調査により市教委が把握している銚子資産の概要について整理します。なお、把握している銚子資産の一覧は巻末資料に掲載しました。

◆有形文化財

①建造物

・寺社

寺社建築調査により23寺社37棟を調査し、その中で建築年代が判明した寺社は17世紀6棟、18世紀9棟、19世紀5棟の計20棟です。17世紀に建立された猿田神社本殿と海上八幡宮本殿は、県内でも最も規模の大きいクラスの三間社流造の建物です。猿田神社は本殿内部に別の3棟の間社流造の宮殿を格納しており、これが本来猿田神社の本殿に相当します。これを覆う本殿は「雨屋」と称され、特徴ある形式の建物です。また、海上八幡宮本殿の建築技法は正面向拝の中央の柱間の虹梁を省略し、そこに唐獅子の木鼻彫刻をつけるという他の地域ではあまり見ることがない技法が使われています。

寺院の中では、常灯寺本堂は県内の密教系寺院の代表例とも言われ、境内には仁王門、鐘楼、白山神社があり、江戸時代の地方寺院の景観がよく残っており、江戸時代前期から後期にかけて

の建築様式の変遷を各建造物から読み取ることができます。

・産業関連施設等

幕末から昭和 20 年頃までの水産関連施設や醸造施設、水運、灯台や給水塔、駅舎などの産業関連施設を 18 施設 29 棟把握しています。

本市を代表する船主である西廣家は江戸時代末期に紀州から移り住み、2 代目治郎吉が水産業を始めました。農家屋敷風の主屋と缶詰工場、網等の収納施設として利用していたと伝わる 2 棟の倉庫が一括で残っていることにより、江戸時代以降の水産業の歴史を伝える建物群として位置付けられています。主屋には、洋風の様式や技法を用いた張り出し部分が併設されています。これは銚子漁港周辺で昭和 10～20 年頃に建設された同規模の木造和風建造物に見られる特徴です。1645 年（正保 2）に醤油醸造を開始したヤマサ醤油株式会社に関連した 6 棟の建物は、太平洋戦争の空襲から免れ、現在も醸造業の現役の施設として使用されています。

銚子湊の賑わいを伝える廻船問屋であった磯角商店の主屋は、船を造るために全国各地から集めた木材を使用して建設されました。破風に取り付けられている鯛をモチーフとした懸魚や 2 階の窓にはブリや帆掛け船などの意匠が施されています。また、利根水運で栄えた利根川沿い河岸場には、旧加賀藩下屋敷で使用された建物の部材を譲り受けて建てた滑川家住宅主屋やレンガを用いた門柱や塀、蔵が配置された宮城家住宅など河岸問屋の歴史を伝える建物残り、当時の面影を伝えています。

北太平洋航路のための最初の灯台であり、海上交通の要となる犬吠埼灯台構内には、1874 年（明治 7）点灯の「灯台」※1 と 1910 年（明治 43）建設の「旧霧笛舎」※2（平成 20 年 3 月末用途廃止）をはじめとする施設が残っています。犬吠埼灯台は、1868 年（慶応 4）に来日し、1876 年（明治 9）に帰国するまでに多くの灯台の建設を主導したイギリス人技師 R・H・ブラントンの指導で建設されました。高さ 31m、香取郡高岡村（現 成田市高岡）産の粘土を使用して製造した国産レンガを約 19 万枚使用した煉瓦造の二重壁構造で、初期の煉瓦造塔状構造物として、先駆的な技術が使われています。また、「旧霧笛舎」は 1910 年（明治 43）完成した官営八幡製鉄所の操業間もない時期に製造された鋼板を使用した可能性が高いことがわかっています。

水産業や醤油醸造業が江戸時代に興り発展したのは、気候や自然環境などの銚子の風土と、江戸（東京）が水運により結びついたことで、物資の運搬や大量の消費がなされた結果であり、現在でも産業や水運に関連した河岸問屋という地域と関りの深い建造物が残っています。

※1 国登録有形文化財 「犬吠埼灯台」 （2010 年（平成 22）4 月 28 日登録）

※2 国登録有形文化財 「旧犬吠埼霧信号所霧笛舎」 （2014 年（平成 26）12 月 19 日登録）

・古民家等

これまで西部地域を中心に 11 棟の長屋門を把握しています。野尻河岸で「御城米運送問屋」と称して「御城米」を取り扱っていた滑川家が天保の飢饉の際、救い普請として建設した長屋門が最古のものです。

銚子漁港や外川周辺の漁業集落と利根川沿いの西部地域の集落の建造物調査により、明治後期から昭和初期に建設された築 100 年程度経過している建物を 18 棟確認しました。外川町や長崎町では、寄棟造、瓦葺き、平屋建て、地元の人々が「シブイタ塗」と呼ぶ黒板張りの建物が多く、銚子漁港周辺では同様の特徴を持つ 2 階建ての建物や大谷石を使用した蔵が残っています。また、

利根川沿いの集落では、寄棟造、瓦葺き、平屋建て、出桁造りの住宅や同構造で下見板張りで小壁などが漆喰塗りの建物が多くあり、イヌマキやカイズカイブキなどの生垣で囲まれている家が目立ちます。

・石造物

これまでの調査により 313 基を把握し、確認している中で最も古い 1374 年（応安 7）に造立された板碑は、地元では「飯岡石」と呼ばれる凝灰質泥岩を用いた供養塔です。刻まれている種子は密教における秘法の本尊とされている「紅^ぐ顔^は梨^り色^{しき}阿弥陀如来」で、全国的に見ても極めて少なく貴重な資料です。この板碑を含めて中世の石造物は 2 基、江戸時代 145 基で、明治時代 22 基、大正時代 19 基、昭和以降が 38 基、時期不明 88 基となっています。

石造物に使用されている石材は、犬吠埼周辺で採掘できた「銚子石」という砂岩を利用したものが多く、稀に利根川等を利用して北関東方面から運ばれてきたと考えられる石材を利用した供養塔もあります。また、市内の寺院や「三昧^{さんめ}」という共同墓地には、地元では「宮^{みや}仏^{ぼとけ}」と呼ばれる「銚子石」製の家形の供養塔が数多くあり、本市の特徴的な石造物の一つです。

市内東部地区の石造物については、平成 22 年度から平成 23 年度に市域全体を対象として実施した「銚子資産所在調査」（以下、「所在調査」という。）で石造物を拾い上げましたが、調査内容を整理するまでには至っていません。

また、猿田神社に所在している銚子石（砂岩）製の「燈籠^{とうろう}金石^{きんせき}管^{かん}」は、銘文によると 1708 年（宝永 5）11 月に銚子外浦の酒屋又兵衛が猿田神社に奉納したものです。金石文に記されたものとして最も古い「銚子」の地名です。燈籠が寄進された宝永年間（1704～1710）には既に「銚子」という地名が広く用いられるようになった時期と考えられる資料でもあります。

②絵画

絵画の把握数は非常に少なく、現在、東光寺所有の室町時代前半頃（14 世紀～15 世紀）に製作された絹本^{けんぼん}著色^{かけふくそう}の掛幅装^{じゅうにてんがぞう}の「十二天画像」と「真言八祖画像^{しんごんはっそがぞう}」の 2 点です。作者等は判明していませんが、繊細で華やかな表現を伺うことができます。「真言八祖画像」の表具背面に 1482 年（文明 14）に奈良で東光寺二世信恵が求めたとの墨書^{ぼくしよ}が残り、この頃に密教の教義が本市に及んでいたことを伝える資料としての価値も有しています。

③彫刻

市内の各寺院が所有している仏像等を 168 躯把握し、時代が把握できたものの多くは近世以降の作です。平安時代後期（11 世紀半ば～後半頃）の作である東光寺所有の「木造阿弥陀如来立像」が市内で最も古い仏像です。また、鎌倉時代初期の作である常灯寺所有の「木造薬師如来坐像」は、1243 年（仁治 4）に海上氏を称し、当時、この地方を治めていた領主である平胤方をはじめ多くの人々の寄進を受け、仏師豪慶によって修理されたことを示す墨書^{ごうけい}が胎内^{たいない}全面に残り、当地域の中世の歴史を知る上で重要な資料です。

④工芸品

飯沼観音の本坊である円福寺は、平安時代初期の制作と推定されている仏教法具の一種である「饒^{によう}」（保護法第 48 条第 1 項の規定による出品勧告：奈良国立博物館）や享徳 11 年（1462 年・寛正 3）銘が入った「梵鐘」、1669 年（寛文 9）に京都次郎左衛門などの手により縫い上げられた「釈迦涅槃図 附 釈迦涅槃図由来記」などの工芸品を所有しています。この涅槃図は、各種の

色糸で細かく刺繍で描かれており、全国的にも類例が少なく、寺院関係者や近郷の村々の庶民などの寄進者の名前が刺繍されており、その他遠く、紀州、泉州等の地名が見られ、当時の信仰の広がりを知ることができる資料です。

⑤古文書

これまでの調査結果から個人や寺社、町内会等が所有している古文書を 14,395 点把握しています。水産業や醸造業、水運などの産業に関連する古文書や中世海上氏に関連する円福寺が所有する「中世文書」などがあります。

永年、町内の役員の間で「区有文書」として町内の歴史を綴った古文書が引き継がれてきた地域があります。その中には、「検地帳」や「地籍図」なども含まれており、地域住民にとって身近な地域の歴史を伝える資料です。

⑥考古資料

岡野台町に所在する等覚寺付近で発見された「金銅^{こんどうきようづつ}経筒^{にょうぼう}」は、1252 年（建長 4）2 月 5 日に平胤方が亡き母親の供養のために如法に書写した写経を経筒に納めて埋納したことが記されています。県内でも出土例が少なく、銘文も刻まれている重要な資料です。なお、「胤方」の名は常灯寺の「木造薬師如来坐像」の胎内の墨書銘にも見ることができます。

これまで実施した発掘調査により把握した考古資料には、銚子の海岸に露出しているチャートや古銅輝石安産岩、砂岩（銚子石）を使用して作った石器や、犬吠埼周辺の白亜紀の地層から見つかるコハクを使ったのではないかと推定されている栗島台遺跡出土コハク製の装身具とその未製品は特徴的な資料です。縄文土器をはじめ各時代の土器には、他地域で使用されている土器の文様と同様の特徴を持つものや胎土分析の結果から銚子に運び込まれたものもあります。地元の産物を利用して製品を作り、他地域との交易や交流を考古資料からも伺い知ることができます。

⑦歴史資料

歴史資料で把握しているのは 8 点です。市教委が所有している「紙本淡彩銚子名所絵図」は、江戸時代天明年間（1781～1788）頃の銚子の名所 14 カ所の風景画とそれらを説明する小文が記され、この頃の銚子を考証することができます。市内にはこの他に同様の名所図会（絵）を寺院や個人が所有しています。

銚子電気鉄道株式会社には、1922 年（大正 11）ドイツ・AEG 社製の小型電気機関車「デキ 3 型電気機関車」をはじめとする大正から昭和初期に製造された車両が残っています。デキ 3 型は 1941 年（昭和 16）に入線し、銚子駅から銚子電鉄仲ノ町構内までのヤマサ醤油専用線で、製品である醤油や原料を積載した貨車を牽引していました。

◆無形文化財

芸能の分野で把握しているのは 8 件です。市域内の 3 町内で神楽を行っていましたが、現在、定期的な活動を行っている団体は高神連の 1 団体だけとなり、正月を中心に渡海神社に神楽を奉納しています。1864 年（元治 1）の春、銚子沖にイワシの大群が押寄せ、未曾有^{みそう}の豊漁となり、漁師たちが大漁祭を行うために、飯貝根浦の網元・網代久三郎と地元の名士・松本旭光、俳諧師の石毛利兵衛が作詞し、常盤津の師匠 遊蝶が作曲、清元の師匠 きん子が踊りを振り付けて完成したといわれる「銚子大漁節」は、銚子の漁業の風景を伝える唄であり、今でも盆踊り等で市民に親しまれています。また、天明の飢饉の際、高崎藩の米蔵を開き、銚子で暮らす人々を助け

たと伝わる^{しょうがわもく さ えもん}庄川 奎左衛門を偲び唄われた「じょうかんよう節」もあります。

工芸技術関係の分野で把握しているのは4件です。市内には漁師の生活を支える副業として始まった産業である「銚子縮」や「籐製品」、そして陸^{おか}に残り家族に大漁を知らせるために掲げられる「萬祝式大漁旗」の染物などの伝統工芸品があります。「銚子縮」の技を受け継ぐ常世田氏は千葉県指定無形文化財保持者に認定されています。

◆民俗文化財

①有形の民俗文化財

・風習

本市には、昔から漁師たちの間でカメが網にかかった場合、とっておきの酒をふるまい、海へ帰す風習があり、利根川の河口と夫婦ヶ鼻の間に「カメおくり」と呼ばれる場所が昭和30年代までありました。万一、カメが釣針にかかって死んでしまった場合は、漁師たちは自分の祖先より立派な墓「亀の子さま」（供養塔）を建てました。「亀の子様と亀の枕」という民話があり、漁師と亀の関係はこの民話を通して広く認知されています。ウミガメに関する風習は、県内では本市と天津小湊町に集中し、市内の川口神社をはじめカメの供養塔を35基確認しています。また、川口神社には1基の「鯨墓」もあります。

・絵馬

これまでの調査により、市内の14寺社で101点を把握しました。制作年代は江戸時代の絵馬が19点、明治期が53点、大正期23点、昭和期が6点で、最も古い絵馬は1752年（宝暦3）の猿田神社が所有する「棒杖奉納額」です。円福寺が所有する1816年（文化13）に制作された『平敦盛と熊谷直実組討図』の絵馬は2代鈴木北斎辰政の作といわれ、この絵馬には「江戸南茅場町願主 橋本市兵衛」の名が見られます。また、漁業関係者や海運関係者に航海の安全を願う「波切り不動」として篤い信仰を集めていた和田不動堂には、江戸時代後期から昭和までの38点の奉納絵馬があります。これらの絵馬は、地元のみならず、江戸の漁業関係者や江戸庶民から奉納されています。境内には、海産物関係者や江戸商人が奉納した石塔類があり、江戸と銚子の結びつきの強さを伺い知ることができます。

・民俗資料

市教委が収蔵している民俗資料を再整理し、漁労用具、利根水運関係資料、干鰯・鰯粕関係資料、海苔製造関係、商業及び醤油関係資料、諸職用具、農業用具、養蚕・製糸・機織関係資料等を把握しました。中でも漁労用具は多様な道具が残っており、「漁具と衣類」「船関連具」「船上での食具」「漁網修理用具」などの漁の動作を示す資料があります。また、干鰯や鰯粕の製造工程を示す道具、高瀬船の模型やその仕様書、設計図と高瀬船の鑑札などは、本市の水産業や利根水運関係資料として重要なものです。

②無形の民俗文化財

・祭り及び行事

これまでの調査結果から産業や自然現象に関わる祭礼や人の成長に伴う儀礼など39件把握しています。漁業に関連するものとして、一年で最初の出漁の際、その年の豊漁と安全を祈る「漕^{こい}出^で」や、銚子では女性が船に乗ってはいけないといわれているので、「明神講^{みょうじんこう}」を行い、海上で働く家族の安全と豊漁を祈っています。

利根川沿いの西部地域には「おびしゃ（おびしゃ）」や「花見正月」などが残っている地域もあります。疫病除けや悪霊除けでもある「辻切り」、海からの災いを鎮める目的で始まり、20年に一度執り行われる「式年三社御神幸」は外川浜で「お浜下り」が行われます。人の成長に伴う祭りとして、市民の間では「浅間様」と呼ばれる「浅間様の初山参り」や地域の若衆入りをした15歳になった男性を対象とした「アンババヤシ」があります。

◆記念物

①遺跡

・貝塚、古墳、城郭等

これまでの県及び市教委が実施した発掘調査等により把握した縄文時代の貝塚は、後期から晩期の余山貝塚で、チョウセンハマグリを主体とする貝層が確認されており、これ以外にも大量の貝輪や骨角器などが出土しています。また、縄文時代前期から中期を主体とする栗島台遺跡では地点貝塚が確認されています。

野尻古墳群は既に墳丘が消滅し、周溝だけが存在する古墳も多数存在する可能性が高いが、現在、前方後円墳1基、円墳8基、方墳3基が確認できます。そのうち、市内で最も大きい規模を誇る1号墳は発掘調査を行っていませんが、墳丘の形態や規模、立地条件から古墳時代後期に築造されたと推定し、市指定史跡として保護しています。また、横穴墓については、利根川沿いの下総台地の斜面を中心に6遺跡13基を確認しています。県教委は市指定史跡として保護している中島城をはじめとする9つの城郭跡の所在調査を行いました。

・歴史の道

文化や人々の交流の舞台となった街道や水路、それらに関わってきた寺社、道標などの総合的な調査が行われ「銚子道」「多古銚子街道（銚子街道）」「利根水運」「東廻り海運」の4つの街道が本市と関連をもっていたことが分かっています。

②名勝地

これまでの調査から自然名勝5件を把握しています。海岸沿いの地質時代の地層や岩塊が海岸線に露出し、激しい波浪とせめぎ合う中で豊かな自然景観が生み出され、この景観が浮世絵、文学作品、旅行記等に登場し、江戸時代後期以降、磯めぐりとして隆盛を極めました。これらの自然景観は、三方を水域に囲まれた銚子ならではの風景です。

また、犬吠埼には自然を生かした借景庭園が1905年（明治38）に完成した旧伏見宮家別邸銚子瑞鶴荘にありました。

③植物、地質鉱物

・植物

下総台地上はスダジイやタブノキの茂った照葉樹林帯で、人の手が加わっていない環境で極相状態となっている渡海神社と猿田神社の社叢林が「極相林」として文化財指定されています。屏風ヶ浦の海食崖上の休耕田が深く泥沼化し、食虫植物が群生している区域を「大谷津食虫植物群生地」として地元町内会の協力を得ながら保護活動を行っています。保護区域内には絶滅危惧種のムギガラガヤツリ、食虫植物のチョウシタヌキモやムラサキミミカキグサが生育し、定期的な調査により51科158種の植物を確認しています。

海岸線近くの浅い海域に見られる「スガモ群落」（浅海）や海岸沿いの強風が吹きつける岩場の

岩の割れ目や凹地などの生育環境に応じた植生が見られる「犬若海岸崖地植生」（海岸風衝崖）が確認されています。北からの寒冷な親潮と南からの温暖な黒潮が合流する地点に位置する本市は、その影響が海藻や潮間帯付近に生える種子植物にも現れて、親潮系と黒潮系の海藻が共存する特徴的な地域でもあります。

・地質鉱物

本市の海岸線には様々な地質時代の地層が露出し、比較的安全に観察できる場所が多くあることから「地層の博物館」といわれてきました。現在、市域内で19カ所の地層や岩体（岩塊）を確認しています。市内で最も高い標高73.6mの愛宕山や犬岩、千騎ヶ岩は、泥岩からなる千葉県最古の地層で、約2億年－1億5,000万年前のジュラ紀と推定されています。犬吠埼周辺には白亜紀の浅い海で堆積した地層を観察することができます。この犬吠埼周辺の銚子層群の砂岩が「銚子石」と呼ばれ、砥石や石造物や建築資材として古くから他地域に流通しています。今のような太平洋に突き出た半島状になったのは、東海岸一帯に硬い岩石が露出し、激しい波浪からの侵食を防いだことも要因となっています。銚子の大地の成り立ちは、その後、この土地で暮らす人々を支える大きな役割を果たしています。

◆集落調査

これまで5つの地区の集落調査を実施し、漁業や利根水運、商業、農業などの各地域の経済活動の歴史に基づいた集落が形成され、町並みや屋敷構えにそれぞれ特徴が見られます。産業の近代化や空襲もあり、他の地域よりも歴史的な町並みは少ないように見えますが、江戸時代から続く漁業集落や街道沿いを中心に歴史文化を伝える集落とそれを構成する銚子資産が確認できます。

◆埋蔵文化財包蔵地

旧石器時代以降の埋蔵文化財包蔵地を190カ所現在確認しています。その内訳は、散布地や集落跡が139件、貝塚1件、古墳等が32件、城郭跡等10件、製鉄跡4件、そしてその他に幕末に美加保丸が函館に向かう途中で黒生海岸の岩礁に乗り上げ、沈没した遭難の地や砲台跡など4件所在しています。埋蔵文化財包蔵地は下総台地上だけではなく、利根川沿いに形成されている標高約7m前後の浜堤上にも多数立地しています。

◆地域に所在する銚子資産

ここでは、文化財の類型に含まれない銚子資産の特徴について整理します。

市内に伝わる民話を44話採集し、「銚子の民話」（昭和62年3月発行）としてまとめています。採話された民話の中には、厳しい自然の中で助け合いながら、海に挑み、海を拓いてきた人々を語るものや漁民の信仰に関するもの、動物が登場する話が多いことも特徴の一つです。

風光明媚な銚子の景観を楽しむために多くの文人墨客が訪れ、本市の風景が様々な文学作品などに登場し、70作品の作者や作品と銚子との関りを「銚子と文学者とのふれ合い」（昭和55年3月発行）にまとめました。

「銚子言葉」は、言葉の響きが重く、東京言葉のような軽やかさがなく、言葉の末尾に「べ」・「ぺ」を用いる「べえべえ言葉」やカ行やタ行の濁音化、そして訛りが多いといわれています。また、漁業地域と農業地域、商工業地域でも戦前までは地域ごとの話ことばに特徴がありました。新たな産業の興りと発展による人の移住による関西系のことばや水運の発展に伴う東北系の言

葉、対岸の茨城県の言葉など各地の言葉が入り混じっているとされています。現在、市広報紙「広報 銚子」において、地元の方言「銚子弁」を紹介するコーナーが設けられています。

本市が市制施行した昭和8年頃の市内の状況を映像化した「踊る大銚子」や古い写真、そして個人所有の約100点の絵葉書等のデータの提供を受けています。これらの資料は、市域内の景観復元などの資料となるため継続して収集していく必要があります。

平成22(2010)年度から平成23(2011)年度にかけて、緊急雇用創出事業の補助金を活用して「所在調査」を実施しました。町内を単位として、文化財の類型や指定未指定に捉われることなく、その地域らしさを感じられるものすべてを対象として調査を実施してきましたが、調査結果を確認すると、文化財の類型に捉われているものが多く拾い上げられている印象を受けます。現在、多種多様な多くの銚子資産の所在を把握していますが、調査成果やより詳細な内容の整理が進んでいません。

各町内を単位として進めてきた「所在調査」により把握した「銚子資産」は、その地域で大切に守り、後世に伝えていこうとする地域住民の気持ちが付加された資産であり、地域へのアイデンティティを体現するものでもあります。今後は、これまでの調査成果を整理し、調査に地域住民が参加できる体制を整え、より地域の思いに沿った銚子資産を把握していくことが大切で、調査を推進していく必要があります。



広報ちょうしNo.1225 2020.10

種類		調査対象		把握件数	今後の課題
有形文化財	建造物	寺社建築		23寺社37棟	■ 主要な寺社の把握は済んでいるが、全て把握できていない。今後、「文化財基本調査」を実施する寺社がある。
		産業関連施設等		18施設29棟	● 定期的な状況の確認等が必要である。
		古民家等	長屋門	11棟	■ 地域による把握の偏りがみられ、継続的な調査が必要である。保存措置を講じる仕組みを伝え、保存につながる取り組みを推進する。
			古民家	18棟	
		石造物		313基	■ 中央及び東部地区の把握が不十分で、調査内容に偏りがある。
	絵画	絵画	2点	※ 所在に関する情報はあがるが、市全体で把握できていない。	
	彫刻	仏像	168軀	● 定期的な状況の確認が必要である。	
	工芸品		3件	★ 市全体の情報を把握する必要がある。	
	書籍・典籍	—	—	★ 市全体の情報を把握する必要がある。	
	古文書	古文書	14,395点	■ 主要な資料は調査が終了しているが、更なる資料の掘り起こし等を進めていく必要がある。これまでの調査成果を一元化し、市教委で保存状況を把握していく必要がある。	
	考古資料	考古資料		1件	※ 発掘調査の出土品を「考古資料」として位置づけ、価値を把握し、必要に応じて指定措置を講じていく。
			発掘調査での出土品	10件	
歴史資料			8点	■ 一定の情報を把握しているが、追加調査を進める必要がある。	
無形文化財		芸能		8件	★ 様々な取り組みの中で情報を収集しているが、「文化財」としての基礎調査ができていない。継承活動が難しい状況にあり、「伝統芸能」の実態の把握調査を早急に実施する必要がある。
		工芸技術		4件	
民俗文化財	有形の民俗文化財	風習		35基	■ 調査区域に偏りがあり、西部地区の調査が十分ではない。
		絵馬		14寺社101点	
		民俗資料		1,088点	■ 市教委の収蔵資料の調査が終了。今後は個人所有資料の掘り起こし等を進めていく必要がある。
	無形の民俗文化財	祭り・行事		39件	★ 継承活動が難しい状況にあり把握調査を早急に実施する必要がある。
記念物	遺跡	貝塚		2遺跡	■ 埋蔵文化財包蔵地の把握の中で、一定の把握はできているが、追加調査を実施し保護措置を講じる必要がある遺跡等を選定していかなければならない。
		古墳		13基	
		横穴他		6遺跡13基	
		城郭跡		9遺跡	
		歴史の道		4街道	
	名勝地	自然名勝		5件	■ 一定の把握はできているが、追加調査が必要である。
		庭園等		1件	★ これまで把握していないため、計画的に調査を進めていく。
	動物・植物・地質鉱物	動物		—	★ これまで把握していないため、計画的に調査を進めていく。
		植物	極相林	3地点	■ 県立中央博物館が実施した市域全体の植生調査を県立中央博物館が実施しているが、調査成果が公表されていない。成果を共有し、定期的に確認していく必要がある。
			県自然環境保全地域	1地点	
			大谷食虫植物群生地	51科158種	
		地質鉱物	地質鉱物	19地点	▲ ジオパーク活動と連携して、継続的に調査を実施し、保護措置が必要なものについては指定等を行う。
	化石産出地		47地点		
文化的景観		集落		5地区	▲ 市域全体が把握できていない。
伝統的建造物群				—	
埋蔵文化財包蔵地				190遺跡	■ 一定の把握ができているので、遺跡範囲の精度を高める必要がある。
銚子市の 資他産の	民話			44話	▲ 調査は実施したが、整理や分析が不十分である。今後、「ものがたり」や「文化財保存活用区域」で活用するので、不十分な部分は整えていく。調査する対象である「銚子資産」について分かりやすく周知し、今後も市民目線に沿った銚子資産を把握していく。
	方言・いい伝え			(1,130語)	
	文学作品			70作品	
	写真・絵葉書			(100点)	
	町内ごとの把握			108町内	

●把握できているが定期的に確認が必要 ▲調査実施中で継続調査が必要 ■一定の把握はできているが追加調査が必要
★新規調査が必要 ※所在に関する情報がある

把握件数 (○件) のように記載されている数値は約○件と読む

表6 銚子資産の把握の状況

(3) 把握した銚子資産の特徴

これまでに把握した銚子資産を整理すると、私たちの暮らしの基盤である「大地の成り立ち」や「自然環境」を形成する銚子資産、風土と地の利を生かした「モノづくり（＝産業）」を興し、「周辺の地域との交易や交流」を伝える銚子資産、そしてこの土地での「暮らし」で育まれた銚子資産などの多種多様な「銚子資産」が所在していることがわかりました。

この土地で暮らした一番古い歴史を伝える銚子資産は、約 28,000 年前の旧石器時代の三崎 3 丁目遺跡からの出土品です。人々は銚子の海岸で確保できる石材を使って石器を作り、大地の恵みを生かした暮らしの第一歩が始まりました。ここで使用する石材は、長い年月をかけて銚子の大地の一部となったチャートや砂岩などで、海岸沿いに露出していることから比較的容易に採取することができました。その石材を使って製作した石器や材料となる石材が他の地域と交易する際の商品となったのです。そして陸路で、またいつのころからか太平洋などの水路を使い、銚子からよその土地へ出かけ、他地域の人々が銚子の産物を求めてやってくるようになりました。さらに人とモノの移動に伴いその土地の文化も往来します。太平洋に突き出た銚子で暮らす人々が、そして銚子を目指して来る人々が、「東へ、西へ」、「北から、南から」と「行ったり、来たり」を繰り返す時間の中で、「銚子ならではの」魅力ある銚子資産となりました。

「大地の成り立ち」や「自然環境」の形成に関連する銚子資産が基盤となって、太平洋に突き出た半島状の地形が暮らしの舞台となりました。土地の恵みを上手に生かした銚子資産を生み出し、さらにそれを活かして他地域との交易や交流により、「銚子ならではの」銚子資産へと人々の手によって育まれていきました。

◆人々の暮らしに関連する銚子資産

	「モノづくり（＝産業）」に関連する銚子資産	「周辺の地域との交易と交流」を伝える銚子資産	「暮らし」で生まれ、育まれた銚子資産
旧石器時代～弥生時代	三崎 3 丁目遺跡・粟島台遺跡・余山貝塚・銚子産石材を使用した石器・コハク製装身具・貝輪・骨角器 等	他地域の特徴を有した土器 他地域の石材を使用した石器 罎	漆塗土器 炭化米（稲作）・紡錘車 等
古墳時代～平安時代	香取の海での漁業 等	他地域から搬入された土器 他地域の石材を使用した石器	円福寺や銚港神社創建 木造阿弥陀如来立像 等
鎌倉時代～安土・桃山時代	石造物の石材の切り出し 等	木造薬師如来坐像（常灯寺）・宮内家文書・津・板碑・梵鐘	木造薬師如来坐像（常灯寺） 円福寺中世文書・城郭跡 等
近世	漁業関連資料・干鰯製造関係資料・醤油醸造業関連資料 造船関係資料 等	銚子湊・利根水運・海運・河岸場・河岸問屋・高瀬船関係資料・古文書 石造物 等	絵馬・講・天正検地帳 等
近代	搾粕・旧西廣家住宅伝説工場・焼玉エンジン製造・簾製品 等	犬吠埼灯台・旧霧笛舎・磯角商店主屋・高瀬船等の鑑札 等	伊達巻（漁師のプリン）

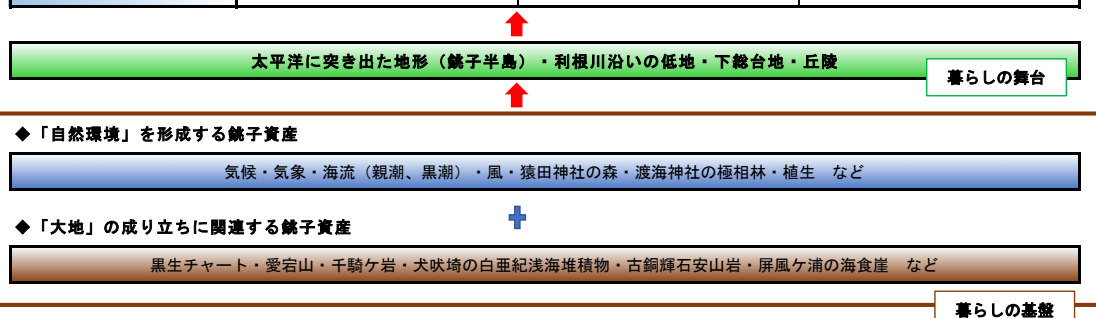


図 28 銚子資産の特徴

3. 銚子市の歴史文化の特徴

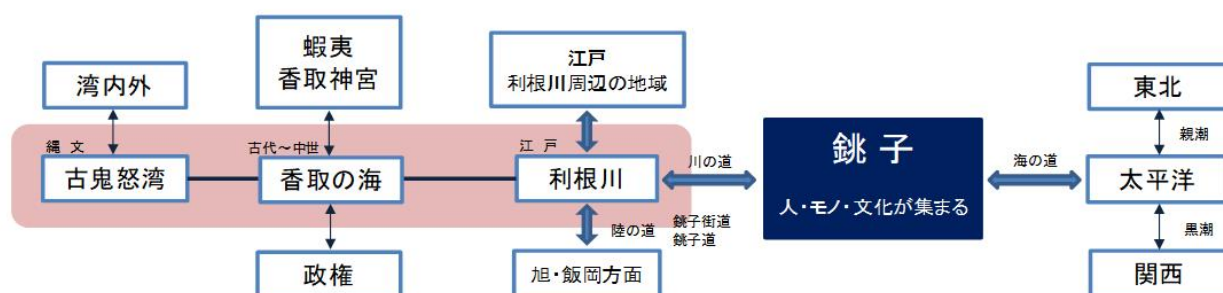
(1) 歴史文化の特徴

円福寺の境内には、「ほととぎす 銚子は国のとつぱずれ」という江戸の豪商鈴木金兵衛（俳号 古帳庵）が詠んだ句碑が残っています。この句は、本市の地理的特徴をよく表しています。銚子は関東平野の最東端に位置し、太平洋に突き出した半島を呈し、いつの時代も三方を水域に囲まれています。まさに、この句のとおり「とつぱずれ（突外れ）」に位置し、この地理的特徴を「岬」として表現します。

銚子では、約 28,000 年前の旧石器時代から「風土」と「地の利」を活かした人々の暮らしが始まりました。この風土や地の利がもたらす「大地の恵み」を活かしたモノづくりの町となり、「陸の道」「海の道」「川の道」の3つの道で周辺や遠方の地域とつながり、人やモノが集まり、銚子は交流や交易の舞台となりました。ここに集まったモノがこの地を介して他の地域へ運ばれ、物流のターミナル基地としての役割も担ってきました。さらに人とモノが動くことで、江戸を中心にさまざまな芸術文化が銚子にもたらされ、文化人たちとの交流により独自の文化も育むことができました。

銚子で生まれ育った「地の者」が、銚子を訪れた「旅の者（移住者）」を受入れ、新しい技術、産業、文化を受容し、新しいことへのチャレンジや変化を拒まないことが、協働で「銚子ならではの」へと変容させてきた歴史の積み重ねがあります。そして、この歴史は、大地の成り立ちにしっかりと支えられているのです。

人・モノ・文化が会う。 岬に生きる。



「岬（みさき）」という地形を基盤として、「陸の道（街道）」「海の道」「川の道」が接続し、人・モノ・文化が集散する場を形成しました。

「地の者」と「旅の者（移住者）」の協働により、風土と地の利を活かした 漁業・農業・醤油醸造業等の産業が興り、発展し、持続的に繁栄し続けていきます。

図 29 銚子の歴史文化の特徴

①人・モノ・文化が集散する町

◆「岬」の形成

銚子は地質時代を通して、大地が狭い範囲で隆起した結果、周辺に比べて古く（一番古い地層で約2億年前）、硬い地層が露出しています。その後、約50—40万年前の東京湾が海だった時代は、海水準が高い時と低い時が約10万年周期で交互に訪れました。約12万年前頃は海水準が高い時代で、銚子には海岸線を中心に古く硬い地層が露出していたので、侵食されず、孤島もしくは岩礁となっていました。約12万年前から銚子島に向かって、古東京湾の陸側から土砂が供給され始めたのと同時に今の下総台地が隆起した結果、銚子を東端とした半島が形成されました。

◆利根川以前の状況（図30-①・②）

約6,500年前の縄文時代前期には、温暖化による縄文海進で「古鬼怒湾」が形成され、対岸の茨城県神栖市の砂州も今のように発達していなかったため、銚子は外洋に面していました。その後、海退と毛野川（現在の鬼怒川）などから運ばれた土砂が堆積し、水の出口をなくし、湖沼状況になりました。そして、約1,000年前頃、今日の利根川河口から霞ヶ浦一体は、「香取の海」と呼ばれる内海が広がっていました。

◆利根川の東遷（図30-③）

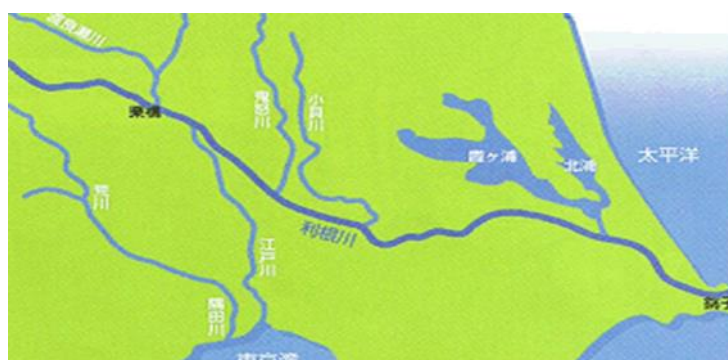
日本最大の流域面積を誇り、日本三大河川※の一つである利根川が、銚子口より太平洋に流出する流路となったのは、江戸時代に入ってからのことです。古くは、上野・越後国境から流下する利根川は、そのまま南下し江戸湾に流入していましたが、徳川家康が江戸で幕府を開府し、江戸を利根川の水害から守り、新田開発を奨励し、年貢米などの輸送体系を確立するために約60年かけて利根川の大土木工事を行い、ほぼ現在と同じ流路になりました。



① 約6,500年前頃



② 約1,000年前頃



③ 利根川東遷後

図30 利根川の東遷

※三大河川は、長さもしくは流域面積の統計上の数値による上位3つの河川。（理科年表第90冊（平成29年度））

②人・モノ・文化を運ぶ3つの道

三方を水域に囲まれている銚子にとって、陸上交通だけではなく、「海の道」、「川の道」を活用した水運は交易や交流の重要なルート（道筋）として利用されてきました。なお、ルートについては、県教委が実施した「千葉県歴史の道調査報告書」を参考にまとめました。

【陸の道】

◆多古銚子街道（銚子街道）

戦国末から近世初期に東総地域と江戸を結ぶ街道は、1602年（慶長7）、^{ふま}府馬―^{かぶらぎ}鏑木―^{おおでら}大寺―^{たこ}多古―^{とうそう}佐倉―^{いづみ}臼井―^{おとわ}大和田―^{ふねはし}船橋―^{やち}八幡―^{いちがわ}市川―江戸というルートが下総台地上に確認できます。そして、銚子方面へは多古で分岐し、南下し、八日市場（現在の匝瑳市）から太田、^{あじど}網戸（現在の旭市）を通り、再度、下総台地を越え、垣根、松岸に出て、利根川に沿って下り、飯沼村に至るルートが利用されていたと推定されています。1678年（延宝6）の古文書※には「銚子海道」という記載があり、延宝期（1673～1681）には銚子街道が成立していたと考えられています。

※網戸村（現旭市）の境論裁許図会及び裏書（網戸区有文書）

◆銚子道

木下河岸から飯沼村へ至る「銚子道」というルートもあり、これは、利根川中流から下流河口までの右岸に沿って走る道で、江戸時代後期頃に「てうし道」と呼ばれるようになりました。江戸中期以降、坂東三十三観音霊場第二十七番札所である飯沼観音への巡礼や東国三社詣とそのオプションツアーとしての「銚子磯めぐり」の盛行により、利根水運の補助的な交通路として発達しつつ、沿線の村々とを結ぶ生活道路でもあったと考えられています。

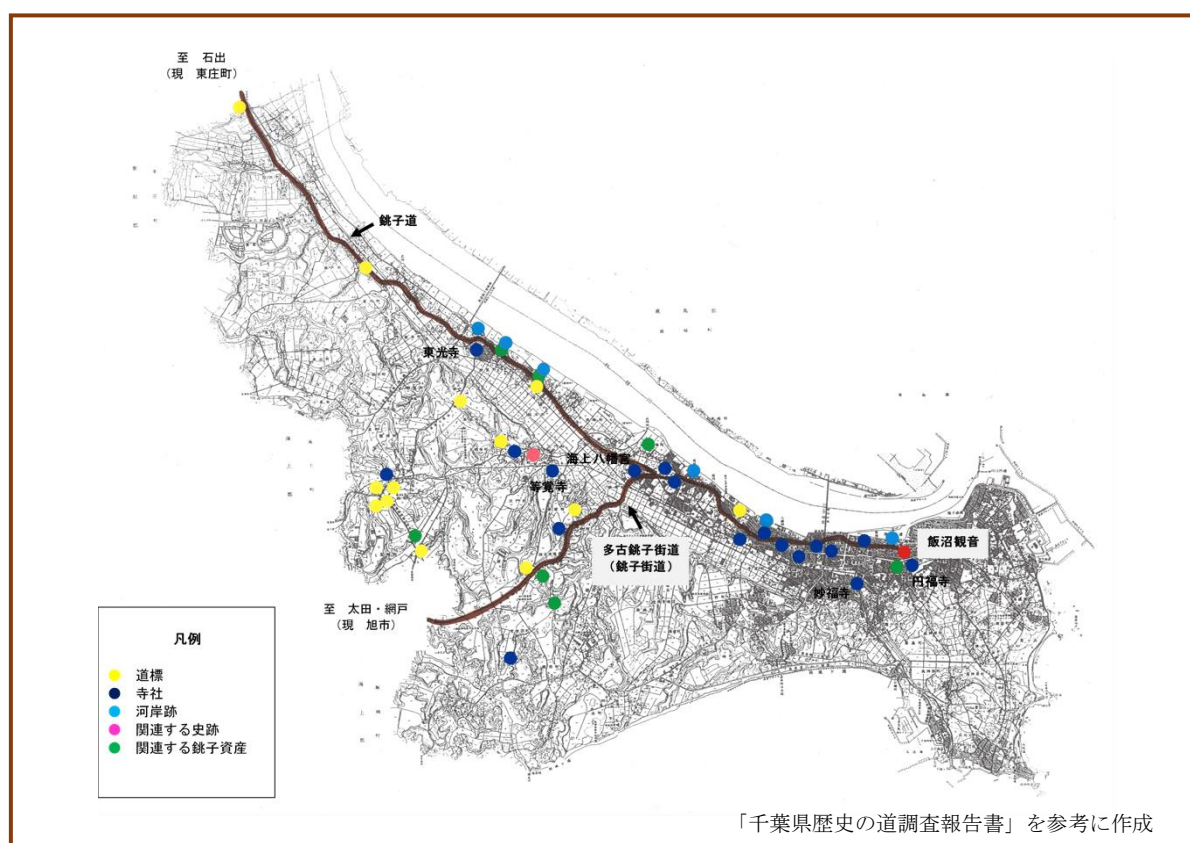


図 31 銚子につながる陸の道（街道）

【海の道】

◆東廻り海運

東北諸藩は、廻米を江戸に輸送するため、本州太平洋岸に沿って南下する航路の使用を試みました。この航路での廻米輸送は早くも慶長期（1596～1615）には始まっていたとする見解もありますが、確認はできていません。1609年（慶長14）、江戸幕府は東北の諸大名に命じて、安是湖海口（後の利根川河口）の「船入普請」と称する築港工事を命じました。1654年（承応3）、利根川の東遷工事の完成により江戸と銚子を結ぶ内陸水運路が開けると、銚子湊は東廻り海運と利根水運の中継地、廻船から高瀬船への積替港として発展していきます。

1670年（寛文10）、江戸幕府は河村瑞軒に命じて奥州の幕府直轄領から城米を江戸に輸送する東廻り航路を開発し、太平洋沿岸の主要な湊を「立務場」に指定、銚子湊もその一つになりました。これが契機となり、東北諸藩の廻米船が銚子湊に寄港するようになり、銚子湊周辺には、仙台藩をはじめ東北諸藩の「蔵」が建ち並ぶようになりました。

◆黒潮の道

日本列島の南岸に沿って流れ、房総半島で東に流れを変える黒潮は、温暖な海洋性の気候をもたらし、そして銚子沖で親潮とぶつかり合うことで良好な漁場を生み出しています。そのため、魚を求めて、さらに新しい産業の技術を携えた人々がその流れに乗って、銚子へやって来るのです。ここではその海流の流れを海からの道に例えて「黒潮の道」として設定しました。

縄文時代、海岸に漂着していたと思われる「ヤシの実」に漆を塗った容器が栗島台遺跡から出土しています。そして、江戸時代、鰯とともに銚子発展の礎となる漁法や醤油醸造などの新しい技術が紀州をはじめ関西方面からの人々によってもたらされました。

【川の道】

◆古鬼怒湾

縄文時代、栗島台遺跡の「コハク」、余山貝塚の「貝輪」や「骨角器」、犬吠砂岩の砥石、チャートなどの石材や石器が、古鬼怒湾沿岸を中心に関東地方に出土している事例があります。「陸の道」とともに現在の霞ヶ浦から利根川下流域の一部や印旛沼を取り込んだ非常に広い古鬼怒湾は、人々の交流や物資を運ぶために重要な交通ルートでした。

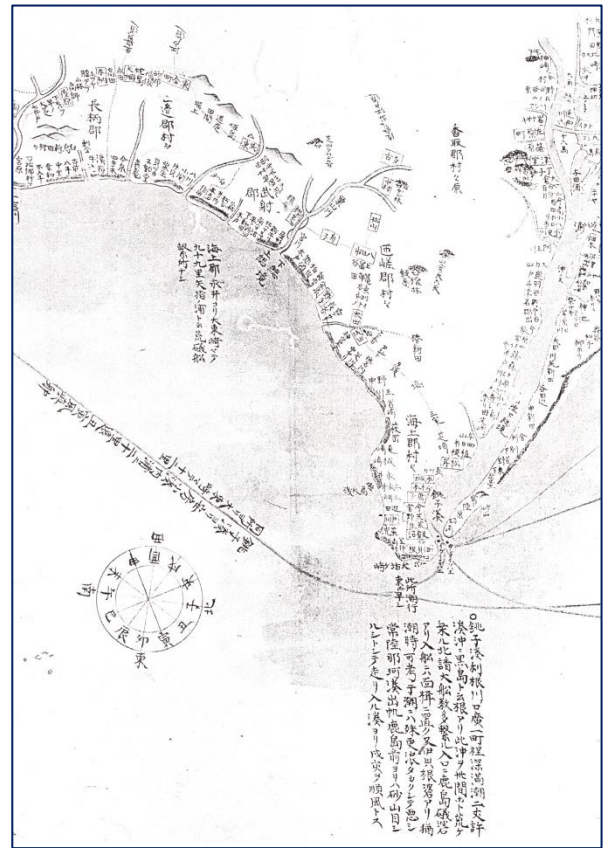


図32 東廻り海運図「皇国総海岸図」より

『海上・河川交通』千葉県歴史の道調査報告書 18

(千葉県教育委員会) 1991より引用

◆香取の海

約1,000年前頃から下総国と常陸国の国境に広がっていた内海で、大和政権にとって蝦夷平定時の物資輸送の重要な交通ルートでした。また、1374年（応安7）の「海夫注文」には、「のじりの津」「飯沼くわうやの津」などの記載があり、「津」が置かれていたことが知られています。戦国期には、野尻や高田の津などを拠点とする商人が現れ、香取の海の重要性は非常に高まっていきました。

◆利根川

利根川が銚子河口で太平洋に注ぐ流路に変わり、銚子と江戸を繋ぐ水運のルートが完成しました。河口付近の銚子湊は東廻り廻船から高瀬船へ積み換える役割を担い、野尻や高田周辺では、「河岸」が設置され、九十九里方面から運ばれてきた荷を扱い、利根水運で江戸へ運びました。

③「風土」と「地の利」を活かした産業

◆漁業と関連産業

銚子の漁業の歴史は、縄文時代まで遡ることができます。粟島台遺跡や余山貝塚から魚を獲るために必要な道具が見つっています。特に余山貝塚からは骨角製の釣針やモリ、ヤスが出土し、貝塚からはスズキやタイなどの魚骨も見つっています。

室町時代の香取神宮文書「海夫注文」の「海夫」は「漁夫」を指すと言われていて、香取神宮に運上^{うんじょう}を納めて香取の海での漁が保証されていました。このため、この時代に漁労が生業として位置づけられる地位に発展したといえます。

江戸時代に入り、崎山治郎右衛門をはじめとする紀州からの旅網の漁師たちが新しい漁法とともに銚子に移住し、外川や飯貝根に漁業集落ができ、漁業を発展させていきました。江戸時代を通じて銚子の漁業を代表するのはイワシ漁で、正保（1644～1648）・慶安（1648～1652）頃、「任せ網^{あみ}」※から「八手網」に代わり、鰯の大部分は食用ではなく、干鰯やメ^{まか}粕の原料として利用されました。鰯以外にも鰹や鯨などをはじめさまざまな種類を漁業の対象とし、利根川でスズキ漁やサケ漁などの内水面漁業も行われていました。

イワシ漁は、明治前半まで使用されていた「八手網」に代わり、明治後半から「あぐり網」が採用され、1864年（万治1）に大漁節^{みぞう}が誕生する程、未曾有の大漁に沸きました。明治10年代後半から不漁期に入り、不漁は大正、昭和初期まで続きました。その一方で、明治末期から漁船の動力化、鉄道による流通の改革で鮮魚消費市場が拡大し、カツオ漁やマグロ漁、サンマ漁が盛んになりました。

漁船が動力化したことで大型化し、銚子港が安全で設備の整った近代的な港になると廻船の寄港も増加すると考えられ、漁港としての銚子港の整備も急ぐ必要性が高まってきました。戦後、1963年（昭和38）に国の第三次漁港整備計画の一環として工事が始まり、安全性を確保した銚子港は、日本有数の漁港へと発展していきました。

もとは、漁家は魚を獲る事を中心に、干鰯の製造や造船、船具漁具、仲買人、廻船問屋などの漁業を支える仕事を兼業的に行っていましたが、しだいに漁業が年間を通して操業が可能になると、それぞれの産業が独立していきました。大正・昭和に入り、造船所ができ、その周辺

に鉄工所や石油商、電気通信関連会社なども増え、戦後になると冷凍施設の需要が高まり、製氷業、冷凍冷蔵業が発展し、干鰯や鰯粕に始まった水産加工業は、化学肥料の普及により需要が減り、食料品としての加工が増加していきました。

※ 江戸時代初期から使用されていた漁船6隻、漁師80～90人を要するイワシを獲るための巻き網。江戸時代中期以降衰退した。

◆農業

米作りに適した土地が少ない銚子では、稲作は弥生時代に始まり、これ以降、米や麦を栽培してきました。江戸時代中頃に甘藷栽培が始まり、明治中期以降、甘藷を原材料とした澱粉生産が増加し、銚子では醤油醸造業に次ぐ産業へと発展しました。第二次世界大戦後に澱粉の需要が激減したことで、甘藷栽培が衰退しました。1953年（昭和28）以降、キャベツ生産を開始し、現在、春系キャベツの一大産地へと成長し、その後も大根やメロンなどの野菜や果物の栽培を積極的に取り組んでいます。

銚子の農業は、他の産地と競合しない収穫時期を海洋性の気候を最大限に利用して設定し、大消費地である首都圏から100km圏内という地理的優位性を活用して発展しています。

◆醤油醸造業

1616年（元和2）に摂津国西宮（現兵庫県）の酒造家で海産物業を営んでいた真宜九郎右衛門が銚子を訪れ、飯沼村の田中玄蕃に醸造法を伝授したことで銚子の醤油作りが始まったと伝わっています。醤油醸造に欠かせない「夏涼しく、冬暖かい」海洋性の気候と四季の温度差が少なく、湿度が高いという条件にあった土地であり、利根水運が醤油醸造に必要な原料や大消費地江戸と銚子を結び、発展してきました。当初、紀州など関西から運ばれてきた「下り醤油」が中心であった江戸に「関東風醤油」を送り、大都市として発展する江戸庶民に受け入れられ、銚子の醤油が江戸の食を変えたと言われるほどの地位を得ることになりました。そして、今なお千葉県は全国醤油醸造業の生産量第一位で、銚子はその一端を担っています。

醤油容器として長い間使われていた杉樽を製造していた製樽工場がありましたが、容器が缶に変わり、工場は市内で見られなくなりました。

◆観光

変化に富んだ海岸線の美しさや犬吠埼灯台が銚子観光の見どころの代表的な資源であり、観光業も本市の主要な産業の一つです。銚子観光の歴史は、飯沼観音などへの信仰の旅、海岸線の景観を楽しむ「磯めぐり」、犬吠埼灯台と犬吠埼周辺での海水浴、愛宕山から見た景観が観光資源となり、これまで多くの旅行客を楽しませてきました。

特に、銚子の自然景観は、海岸線を中心にさまざまな地質時代の地層が露出し、激しい波浪を受け奇岩奇礁、海食崖を生み出しています。また標高73.6mの愛宕山は千葉県北東部の最高地点で、周辺には高い山がなく、太平洋に突き出た銚子半島の景観を眺望することができます。この地を訪れた多くの文人墨客の作品に登場することで銚子へのあこがれや興味関心がより一層高まっていき、銚子の素晴らしさを広く知らしめることになりました。

また、避暑避寒、海水浴、文学散歩なども楽しめ、水域に囲まれていることから海釣りや川釣り、そして新鮮な海の幸を堪能できることも観光産業を支える上では重要な要素となっています。

◆石材

千葉県には石器に適した石材産地が少ないため「石無し県」と呼ばれていますが、銚子は海岸線に硬い岩石が露出しているため、旧石器時代からこの岩石を使って石器を作ってきました。例えば、「チャート」や「砂岩」、さらには木の樹脂が化石化した「コハク」が石器や装身具の材料として使用されています。

犬吠埼周辺や長崎海岸を中心に愛宕山中腹で採掘された「砂岩」は、古くは砥石や墓石、供養塔に用いられ、特に砥石としての使用は縄文時代に遡ることができます。1856年（安政3）に江戸へ3万斤送られた記録が残っています。1914年（大正3）には「間知石^{けんちいし}」などの建築土木用として約3万3千円（現在の金額で1億円以上※）、砥石用では約2千円（現在の金額で700万円弱）の生産があった記録が残っています。その後、しだいに生産と需要が低下し、また1972年（昭和47）12月に銚子有料道路愛宕山公園線（現千葉県道286号線愛宕山公園線）の開通に伴い、採掘するための火薬使用が禁止されたため、全く採掘できなくなりました。

※ 大正時代の米の価格が1kg約73銭～255銭として、現在の米の価格は1kg当たり400円～700円。各時代の平均値をとって換算すると3355倍として計算。

◆黒生瓦^{くろはえかわら}

黒生瓦の生産に関する「銚子市史」の記載には、江戸時代末期頃、福井県から移住してきた柳屋が瓦造りを始めたとあります。しかし、天明年間（1781～1788）頃の銚子の名所を描いた「紙本淡彩銚子名所絵図」には、「クロハエノ浦 此辺ノ石ハクロシ 此上ニテカハラヲ焼 ムカシ金ヲホリシアトアリ」とあり、この記述からみると、天明年間頃には瓦生産が始まっていたと考えることができます。黒生地区で瓦造りが発達したのは、付加体の泥岩起源の良質な瓦に最適な粘土が採掘できたからですが、今では原料が採掘できなくなり、生産されていません。市内には、今なお黒生瓦を葺いた建造物が僅かに残り、黒灰色の落ち着いた色合いで風情があります。

◆砂鉄採掘

現在確認されている史料には、1897年（明治30）に犬若鉱山での砂鉄採取を所管庁へ再出願した通知文があります。この犬若鉱山は、1873年（明治6）に砂鉄の採取が始まり、1953年（昭和28）頃まで稼働していました。犬若鉱山の他に大谷津（三崎町）の海岸でも砂鉄を採掘していたといわれています。天保年間（1830～1844）から採掘され、上州（現群馬県）に輸送、染色に利用されていて、地元では屋内床壁材として珍重されたという話を聞くこともありますが、それを示す史料は確認できていません。

◆銚子縮^{ちょうしちぢみ}

「縮」は木綿糸を使用し、普通糸の何倍もの撚りをかけた左撚りと右撚りの二種類の横糸を交互に通して織り込み、織り上がった生地を湯に浸けて揉むと、撚りが戻る時に互いに反発する弾力で生地に細かな凹凸ができます。これをシボ出しといい、何度洗っても縮まない丈夫な織物で、独特の肌触りの良さから広く庶民に親しまれ、江戸の粋を表すといわれ江戸で人気を博しました。

江戸時代から明治時代にかけて生地の丈夫さ、染色の優雅さで好評を博し愛用されましたが、手織りで激増する需要に応じることが難しく、さらに明治以降の紡織機による粗悪品の流通で、名声を落とし、大正時代を境に生産が途絶えてしまいました。戦後、その技術を再興した常世田

真治郎氏の子孫が技術を継承しています。

◆牡蠣殻採取

利根川の河口付近では、牡蠣が繁殖し、牡蠣殻が地中に大量に堆積していました。1897年（明治30）にこの牡蠣殻を焼いて貝灰かいばいを作り、建築用の「漆喰しっくい」の材料を製造し始めました。関東大震災後はセメントが主流となり、貝灰の需要が減り、生産が減少していきました。

◆流通（廻船問屋・河岸問屋）

1374年（応安4）の「海夫注文」から、香取の海に接していた「笹本」「野尻」「飯沼興野」などに「津」があったことがわかっています。海夫が地頭を通して香取神宮に「供菜料くさい」を納めることで、香取の海での漁業と船の運航の特権を保証され、しだいに人や物資を運ぶ廻船などの水上輸送も活発に行うようになっていきました。「津」は交通の要所、水陸交通が交差する場所に置かれ、そこには流通商人が誕生し、大きな力を得ていきます。銚子では、中世から近世にかけて、飯岡方面からの塩などの荷を扱う流通業に携わっていた宮内清右衛門が大きな影響力をもっていたことがわかる古文書等も残っています。

江戸時代に入り、利根水運が確立すると、東北諸藩をはじめとする各地から積荷が集まる銚子湊周辺や、九十九里方面からの荷が集積する野尻河岸や高田河岸に廻船問屋や河岸問屋があり、それぞれ所有している高瀬船等に各地から運びこまれた米穀や干鰯をはじめとした物資を積み換え、江戸へ運びました。

明治以降、利根水運は衰退していきますが、昭和に入り、銚子が漁業で復活し、銚子港周辺で廻船問屋が再び活気を取り戻しました。今日の廻船問屋の役割は、江戸時代とは違い、入港する船に対して、各港の価格情報や水揚げ情報の発信、水揚げの会計処理、物資の仕込み（入替）などの役割を担っています。



浜辺の風景



海藻採取の風景



黒生瓦製造の風景



牡蠣殻業の風景

◆その他

太平洋に突き出た岬の位置にある銚子には、明治期に近代化を支えた施設が設置されました。1872年（明治5）にオランダの土木技師リンドにより設置された水準原標石^{すいじゅんげんびょうせき}、イギリス人技師のブラントンが設計した国産レンガを使用した1874年（明治7）点灯の犬吠埼灯台、1886年（明治19）の銚子測候所、1908年（明治41）には銚子無線電信局が開設されました。

④「岬」での暮らし

銚子での人々の暮らしは、風土や地の利に支えられ、時にその怖さを思い知らされることになり、自然とともに歩んできました。

◆災害

太平洋に突き出た半島で、市域の三方を水域に囲まれているという地理的な特徴が、私たちの暮らしに多くの恵みをもたらした一方で、「海難」、「津波」、「空襲」などの「災い」の歴史もあります。

利根川は河口が狭く、水面下に岩礁が多く、波高の高い三角波により、日本三大海難所のひとつとして知られていました。この場所を航行する時は、他の船を構っていられず、自分の船の安全を確保することが精一杯で、「銚子川口てんでんしのぎ」という言葉が生まれました。河口だけではなく、1868年（慶応4）に岩礁が多い黒生沖で函館に向かう榎本武揚率いる幕府の8隻の軍艦の中の美加保丸^{みかほまる}が遭難するなど海難事故も多くありました。

銚子沖（犬吠埼）は、船舶航行の変針点で重要な場所です。そのため、1874年（明治7）11月に犬吠埼灯台が点灯し、さらに濃霧で灯台の光が届かない際、「音」で船舶に位置を伝える霧信号所も1910年（明治43）に設置され、海の安全を守り続けてきました。

2009年（平成21）に発生した東日本大震災では銚子でも津波被害が発生しました。これ以前にも津波の被害を受け、例えば1677年（延宝5）に発生した延宝地震の津波では、『玄蕃先代集』に「高神村大池まで浪上がり浜通り御林、松一万本余折れ」という記述が残されています。

自然災害ではありませんが、第二次世界大戦末期の1945年（昭和20）2月に下志津陸軍飛行学校銚子分教場（現在の春日町から上野町）が米軍機により攻撃され、その後、同年3月と7月に市街地は空襲を受け、壊滅的な被害を受けています。銚子が空襲被害を受けたのは、軍事施設や水産加工工場があったことや米軍の飛行経路上に位置していたことがその理由とされています。

◆祈りの習慣

自然がもたらす災害と恩恵に向き合いながら暮らす中で、自然に対する祈りの習慣が生まれ、今も受け継がれてきています。

1102年（康和4）、高神の高見の浦が津波による被害を受けた際、海神の怒りを鎮めるために東大社（香取郡東庄町）、豊玉姫神社（香取市）、雷神社（旭市）の三社が銚子の外川浜へご祭神の神輿を浜辺に担ぎ込んだことが起源の銚子大神幸祭は、20年に一度執り行われ、市内に18箇所の関所を設け、神事や芸能などが奉納されています。

漁業関係者の間では、一年最初の出漁の際に行われる「漕出」や旧暦6月15日に執り行われる「大潮まつり」、また家を守る女性たちは「明神講」などを行い、漁の安全を願っています。また、網にかかった亀を大切に扱う「亀の子さま」の信仰もあり、市内の寺社に「亀墓」や「鯨墓」があります。

西部地区には、「講」や「同行」と呼ばれる組織が結成され、西国巡礼や出羽三山巡礼などを行い、男性が参加する「おびしゃ（おびしゃ）」や女性が参加する「花見正月」などを行っている町内もあります。

この他の祭礼や風習として、「大般若経」（余山町・小浜町）、元服の儀式といわれる「あんばまつり」（小畑町）、「辻切」（長塚町・小浜町）、黒生大神宮の「御太刀まつり」（黒生町）、峯神社の「夏越の祓い」（新生町）、海上八幡宮の「流鏝馬」（柴崎町）などがあります。海上八幡宮を氏神とする町内では、玄関の軒下に「お的」を掲げ、家を守る風習があります。

◆文芸と学問

1,000年程前に広がっていた「香取の海」は歌の名所として知られ、1216年（建保4）「なつごろも かつりのうらのうたたねに 波のよるよる かよふあきかぜ」（万代集）という藤原定家の歌が残されています。東庄周辺を治めていた東重胤は、鎌倉将軍家に重用されていましたが、歌人としても有名で、胤行（重胤の子）と将軍家歌会に列席したことが『吾妻鏡』に記されています。

また、猿田神社での御浜下りが行われた際、三川浦矢指浜（現旭市）で蛙歌・春雨が連歌を詠み、神前に奉納しています。このような伝統は、近世初期頃まで引き継がれていました。

「磯めぐり」を楽しむ旅人の中には多くの文人墨客、学者、芸能人がいました。小林一茶、平田篤胤などが来遊し、彼らの影響を受け門人となる者など学問や文芸に興味を持つ人々が増えました。これは、銚子が商業で発展し、経済力を持った結果、例えば、渡辺崋山は行方屋大里家、大槻盤溪は田中玄蕃家に滞在し、豪農、豪商、網元が江戸の文化人のスポンサーとなりました。このような文化の交流が、銚子での学問や文化活動を隆盛させ、幕末以降、宮内君甫による「守学塾」1846年（弘化3）、海上八幡宮の宮司松本胤雄による「懷徳塾」などをはじめとする寺小屋や私塾が開設され、盛んになりました。

また、ヤマサ醤油株式会社の前身である濱口儀兵衛商店の10代濱口儀兵衛（梧洞）が、社会教育事業の経営を目的に私財を投じて1925年（大正14）に「財団法人公正會」を設立し、翌1926年（大正15）4月12日に「公正會館」（現銚子市中央地区コミュニティセンター）を開館し、夜間中学公正學院と公正圖書館の設置運営、各種社会事業活動を展開しました。